

# 2021 韓日交流 作文 コンテスト

한일교류 작문 콘테스트  
作品集

募集は7部門

## エッセイ

日本語エッセイ部門  
韓国語エッセイ・中高生部門  
韓国語エッセイ・一般部門

## 川柳・俳句

日本語川柳・俳句部門  
韓国語川柳・俳句部門

## 韓国旅行記

日本語 韓国旅行記部門  
韓国語 韓国旅行記部門

〔主催〕 駐日本国大韓民国大使館 韓国文化院、東京韓国教育院

〔共催〕 駐大阪大韓民国総領事館 韓国文化院 〔協力〕 韓国観光公社 〔後援〕 韓国コンテンツ振興院





〔主催〕 駐日本国大韓民国大使館 韓国文化院、東京韓国教育院

〔共催〕 駐大阪大韓民国総領事館 韓国文化院

〔協力〕 韓国観光公社

〔後援〕 韓国コンテンツ振興院



## 実施概要

事業名

# 韓日交流 作文コンテスト 2021

～ 皆さんに伝えたい想いを書いてみませんか～



### 【日程】

- 作品募集：2021年4月19日（月）～8月22日（日）
- 審査：2021年8月23日（月）～9月13日（月）
- 審査結果発表：2021年9月15日（水）
- 受賞作品展示：2021年10月7日（木）～16日（土）

### 【趣旨】

次世代を担う両国の子供から一般の方まで幅広い方々を対象に、互いへの想いを伝え合い、新しい「絆」作りのためのエッセイ、川柳・俳句、韓国旅行記を募集し、表彰する。



## 【募集部門】 全7部門

### <エッセイ>

- 日本語エッセイ部門：中学生から一般の方までが対象
- 韓国語エッセイ 中高生部門：中学生から高校生までが対象
- 韓国語エッセイ 一般部門：一般の方が対象

### <川柳・俳句>

- 日本語川柳・俳句部門：小学生から一般の方まで対象
- 韓国語川柳・俳句部門：小学生から一般の方まで対象

### <韓国旅行記>

- 日本語 韓国旅行記部門：小学生から一般の方まで対象
- 韓国語 韓国旅行記部門：小学生から一般の方まで対象

## 【応募規定】

### <日本語エッセイ、韓国語エッセイ部門>

- ◇ テーマ（次の中から択一）
  - A「私の好きな韓国料理」、B「私が感じた韓国」、C「私が考える両国の未来」

### <日本語川柳・俳句、韓国語川柳・俳句部門>

- ◇ テーマ  
自由（但し、日本語川柳・俳句部門の場合、韓国または韓国語に関するもの）

### <日本語 韓国旅行記部門、韓国語 韓国旅行記部門>

- ◇ テーマ  
韓国旅行（韓国旅行中に感じたことや思い出、エピソードなどを各部門の言葉で旅行記にして投稿）

## 【審査方法】

駐日韓国大使館 韓国文化院内で部門ごとに審査委員が集まり、審査会を開催

## 【審査員】

- ◇ 日本語エッセイ、日本語 韓国旅行記部門  
呉英元（二松学舎大学名誉教授及び駐日韓国文化院 世宗学堂長）  
桜井泉（朝日新聞記者）
- ◇ 韓国語エッセイ中高生・一般部門、韓国語 韓国旅行記部門  
李允希（東京成徳大学教授）  
南潤珍（東京外国語大学教授）  
武井一（東京都立日比谷高等学校教員）
- ◇ 日本語川柳・俳句、韓国語川柳・俳句部門  
兼若逸之（元東京女子大学教授・駐日韓国文化院 世宗学堂運営委員）  
曹喜澈（元東海大学教授・駐日韓国文化院 世宗学堂運営委員）





## 審査結果 (総応募作数：3,113 作)

### 日本語 韓国旅行記部門 (応募作数：83)

#### 日本語エッセイ部門 (応募作数：295)

- ◇ 最優秀賞 (1 名)
  - － 瀬戸ゆず果 (広尾学園中学校)
- ◇ 優秀賞 (2 名)
  - － 鈴木ひな (明星高等学校)
  - － 小松崎有美 (埼玉県)
- ◇ 佳作 (4 名)
  - － 高橋遙名 (鳥取県立境高等学校)
  - － 徐茉那 (鷗友学園女子高等学校)
  - － 吉田豊 (三重県)
  - － 本田千景 (ICS カレッジオブアーツ)
- ◇ 入選 (12 名)
  - － 近藤久孝 (大阪府)
  - － 茂木美櫻 (渋谷教育学園渋谷高等学校)
  - － 足立聖来 (鳥取県立境高等学校)
  - － 高橋里奈 (東京都立大学)
  - － 瀬戸望結 (開智中学校)
  - － 山極笑子 (埼玉県)
  - － 三井耶奈 (甲南女子大学)
  - － 佐藤正 (東京都)
  - － 伊藤静園 (富士見高等学校)
  - － オクニラドミラ (神奈川県立横浜国際高校)
  - － 榊萌 (青森県)
  - － 細江隆一 (岐阜県)

- ◇ 最優秀賞 (1 名)
  - － 長田秀樹 (大阪府)
- ◇ 優秀賞 (2 名)
  - － 本村沙也 (大阪府)
  - － 郡司二奈 (東京都立大学)
- ◇ 佳作 (4 名)
  - － 松村友里加 (大阪府)
  - － 吉村優月 (鳥取県立境高等学校)
  - － 中野浩道 (埼玉県)
  - － 工藤有紗 (女子学院高等学校)
- ◇ 入選 (12 名)
  - － 平井実帆 (京都光華女子大学)
  - － 野田麻子 (学習院大学)
  - － 岡野奈央 (神奈川県)
  - － 森田哲治 (神奈川県)
  - － 関根祥吾 (日本大学)
  - － 川崎良優 (帝塚山学院大学)
  - － 松邑隆史 (愛知県)
  - － 草野洋子 (千葉県)
  - － 鈴木泰雄 (鳥取県)
  - － 斉智司 (埼玉県)
  - － 横山開斗 (立教池袋高等学校)
  - － 坪井佑介 (愛知県立大学)

#### 韓国語エッセイ 中高生部門 (応募作数：54)

- ◇ 最優秀賞 (1 名)
  - － 勝又緋彩 (静岡理科大学 星陵高等学校)
- ◇ 優秀賞 (2 名)
  - － 福山春乃 (同志社高等学校)
  - － 中園楓 (長崎県立対馬高等学校)



◇ 佳作（4名）

- 戸部紗優花（関東国際高等学校）
- 村上未有（愛媛県立新居浜南高校）
- 山岡美月季（広島市立舟入高等学校）
- 武谷和音（兵庫県立長田高等学校）

◇ 入選（12名）

- 安崎日華瑠（札幌静修高校）
- 荻久保花音（エムズ英会話）
- 管波彩葉（大阪府立佐野高等学校）
- 奥住彩羽（関東国際高等学校）
- 庄野日花里（千葉県松戸国際高等学校）
- 砂金咲羽（仙台育英学園高等学校）
- 河合紗良（大阪府立佐野高等学校）
- 池田さくら（神奈川県立横浜国際高等学校）
- 丹羽莉衣菜（愛知県立岩倉総合高等学校）
- 鈴木春菜（埼玉県立岩槻高等学校）
- 道田唯（滋賀県国際情報高等学校）
- 足立梨紗（滋賀県国際情報高等学校）

**韓国語エッセイ 一般部門**  
(応募作数：108)

◇ 最優秀賞（1名）

- 林真由（岡山県）

◇ 優秀賞（2名）

- 津村優希（神田外語学院）
- 山極尊子（埼玉県）

◇ 佳作（4名）

- 高村聡（奈良県）
- 川村文（東京都）
- 佐藤康予（東京都）
- 森林奈穂美（新潟県）

◇ 入選（12名）

- 加藤結葉（東北外語観光専門学校）
- 奥田彩加（北海商科大学）
- 栗原ひなた（北海商科大学）
- 古田紗帆（神奈川県）
- 桑原明子（愛知県）

- 伊藤繁樹（兵庫県）
- 國定昭（大阪府）
- 石井莉帆（新潟大学）
- 松田楓夏（京都府）
- 河住慧（東京都）
- 富沙織（上智大学）
- 田辺慎（東京都）

**韓国語 韓国旅行記部門**  
(応募作数：55)

◇ 最優秀賞（1名）

- 小川真未（千葉県）

◇ 優秀賞（2名）

- 川崎良優（帝塚山学院大学）
- 山尾玲未（大阪府）

◇ 佳作（4名）

- 近藤京子（新潟県）
- 今井結佳子（東京外国語大学）
- 若松友奈（兵庫県）
- 朝野春菜（帝塚山学院大学）

◇ 入選（12名）

- 小山彩乃（成均館大学）
- 山田梨佳（北海商科大学）
- 小野寺花梨（北海商科大学）
- 宮久令子（神奈川県）
- 山田外志栄（愛知県）
- 南須原哉汰（新潟県立大学）
- 山岡七海（大阪府）
- 河村優（大阪府）
- 伊藤未来（東京都）
- 大橋鈴々（獨協大学）
- 本ひろみ（東京都）
- 市瀬理恵（大阪府）



日本語川柳・俳句部門  
(応募作数：1,795)

- ◇ 最優秀賞 (1名)
  - － 中西麻維 (奈良県)
  
- ◇ 優秀賞 (2名)
  - － 坪井京奈 (新潟大学)
  - － 辻井心 (京都国際高等学校)
  
- ◇ 佳作 (4名)
  - － 吉田紋子 (広島県)
  - － 継田真由美 (東京都)
  - － 中村暁代 (岩手県)
  - － 松本美和 (東京都)
  
- ◇ 入選 (12名)
  - － 井深靖久 (愛知県)
  - － 伊藤優臣 (立教池袋高等学校)
  - － 布施喜夫 (東京都)
  - － 塚野真衣 (新潟大学)
  - － 百瀬笙子 (新潟大学)
  - － 森谷朱梨 (北海商科大学)
  - － 三浦日菜子 (鳥取県立境高等学校)
  - － 古賀史子 (愛知県)
  - － 笹木美樹 (愛知県)
  - － 森永裕子 (福岡県)
  - － 藤野美保子 (神奈川県)
  - － 鳴海理香 (青森県)

韓国語川柳・俳句部門  
(応募作数：723)

- ◇ 最優秀賞 (1名)
  - － 池田日向子 (新潟大学)
  
- ◇ 優秀賞 (2名)
  - － 清水洋子 (神奈川県)
  - － 今西慶子 (大阪府)
  
- ◇ 佳作 (4名)
  - － 後藤将司 (東京都)
  - － 田中葵衣 (啓明学園高等学校)
  - － 竹野瑠衣 (大阪府)
  - － 井上和恵 (東京都)
  
- ◇ 入選 (12名)
  - － 松本美優 (新潟大学)
  - － 藤中篤 (京都府)
  - － 角こころ (鳥取県立境高等学校)
  - － 西恒輝 (北海商科大学)
  - － 草野洋子 (千葉県)
  - － 重久華子 (佐賀県立唐津商業高校)
  - － 内川良美 (千葉県)
  - － 池野宗子 (東京都)
  - － 乙坂里恵 (北海道)
  - － 平山あかね (北海道)
  - － 常行真美 (上智大学)
  - － 国原綾子 (神奈川県)

賞

- ◇ 最優秀賞 (各部門 1名、計 7名)  
賞状、副賞 (韓国への旅 3泊4日をペアで)
  
- ◇ 優秀賞 (各部門 2名、計 14名)  
賞状、副賞 (韓国への旅 2泊3日)
  
- ◇ 佳作 (各部門 4名、計 28名)  
賞状、副賞 (ブルートゥースイヤホン)
  
- ◇ 入選 (各部門 12名、計 84名)  
賞状、韓国語教材



## 審査評

### 日本語エッセイ・旅行記部門 審査評

審査委員 呉英元〔二松学舎大学名誉教授〕

受賞者の皆様、おめでとうございます。

日本語エッセイ部門の最優秀賞は、中学生瀬戸ゆず果さんの「私の好きな韓国料理」。「サクサクでピリ辛な韓国のチキン」。「お父さん、サクサクなチキンを食べにいこう」と、久しぶりな父との外出で韓国料理店に行き、「自分のコーラを父のビールと乾杯した。氷がカラン、という」。読みながら笑いが飛び、また、最後の「ハイカロリーで最高に美味しいサクサクなチキン様。これからもお世話になります」で、再び笑ってしまいました。十代の瑞々しい感性に驚き、閃くユーモアが可愛く、煌びやかな表現に惹かれました。



優秀賞は、鈴木ひなさんの「私が考える韓日交流」と小松崎有美さんの「ヤクソク」。鈴木さんは、韓国人の血が入っているわけでもなく韓国に留学経験があるわけでもない、韓国料理とK-POPが好きな高校生で、祖母は韓国が嫌いで、韓国が好きな孫を不思議に思うが、キムチやピビンパが好きな方。そんな祖母に何で韓国が嫌いなのか理由をたずねると、歴史的背景に絡んだ両国の解決できない問題で好きになれないというわけで、孫にも「好きになるもんじゃないわよ」と。これを聞いた鈴木さんの思いが、日米間でのWWⅡ（第二次世界大戦）核問題などを始め、「韓国のものであるからといって頭ごなしに否定して忌み嫌うのではなく、慣れ親しんだ外国文化として認め、広めていくべきだ」と力強く論じているのです。小松崎さんの「ヤクソク」は、新型コロナウィルス感染拡大で過度のストレスと疲労の中でも、看護学校卒業日に指切り約束した韓国人親友を思い、「私たちのゴールは患者さんを笑顔にすることだ」とソウルの彼女に笑顔がつながり、元気につながる。「患者さんの心に寄り添えるのはナースだけなんだ」と呟く声が聞こえてくるようでした。

韓国旅行記部門の最優秀賞は、長田秀樹さんの『『ふるさと』への旅』。「自分はそこにいた」と書き出す文章の流れも、細かい気持ちの描写もとてもよく、内容にも感動され思わず涙しました。「亡くなった父の仕事場から名刺のホルダーを見つけ、国籍出生地と書かれていた『四川』を訪ねて韓国へ行く。「鞆から父の遺影を取り出した。苦勞続きの人生だった父親。仕事一筋に歩んできた優しい父親。広がる景色を父親に見せていると、どうしたことだろう。私は泣いていた。声をあげて泣いていた。葬儀から今日まで一度も父親のことで泣いたことが無かった私が、遺影を胸に泣いていた。自分の源の一つがここにある」。

優秀賞は、本村沙也さんの「100年後の私たちは」と郡司二奈さんの「魔法の言葉」。「魔法の言葉」は、日本と韓国の二つのパスポートをもつ「ハーフ」として、両方のよさを十分に生かす新鮮さが気持ちよく伝わってくる文章です。

最後に気づいたことで、「ハングルで話す」とか「ハングルで聞いた」などの誤って使う例です。よく知っていることで「ハングル」は言葉ではなく、「ひらがな・カタカナ」のような文字のことを意味します。間違わないように気をつけましょう。

### 日本語エッセイ・旅行記部門 審査評

審査委員 桜井泉〔ジャーナリスト〕

#### コロナ禍の中で見つけた「韓国」

昨年に続いて今年もコロナ禍での審査となりました。日本で見つけた「韓国」や韓国料理の楽しみ、かつての旅の思い出がつぶられた作品を読み、実際に行けないからこそ強まる、韓国への熱い思いが伝わってきました。



日本語エッセイ部門の最優秀賞は中学3年の瀬戸ゆず果さんの「私の好きな韓国料理」。今、人気の「サクサクなチキン」をお父さんと食べに行ったときのことです。父との外出は久しぶり。「普段はできない話」もするなど楽しかった様子がよく分かり、中学生の素直な気持ちが表現されています。

「今度は本場韓国へ食べに行くのもいいな」。ぜひコロナが収まったら、家族で韓国に行ってみてください。韓国語が飛び交い、エネルギッシュな人たちがあふれる街で食べるチキンは、また格別でしょう。

旅行記部門の最優秀賞は、長田秀樹さんの『『ふるさと』への旅』。韓国人の父と日本人の母との間に生まれた長田さんが、亡くなった父の「ふるさと」を訪ねる「グルメも観光も縁のない初めての韓国旅行」のことです。

仕立屋だった父が遺した外国人登録証の出生地には、韓国南部の泗川（サチョン）とありました。夕日が沈む中、バスターミナル近くの田園地帯で父の遺影を取り出し、広がるふるさとの景色を見せました。異国で苦勞続きだった父の人生を思い、声をあげて泣きながら自らのルーツを確認したのでした。ショックだったのは、父が韓国人であることを「隠して日本人として生きてきた。幼い頃、家で韓国のことを話すことは禁じられていた。父も韓国の話をしたことはない」というところです。差別を恐れてのことでしょう。私は、自分のルーツを堂々と語ることが許されない日本社会の罪深さに怒りがこみ上げてきました。日本には今、多くの外国人が住んでいます。ルーツを語り、互いの文化を認め合う社会。そんな世の中にならなくてははいけません。

今回、長田さんのようにルーツを訪ねる旅や、韓国にルーツがある人のアイデンティティーに関する作品がいくつかありました。

韓国料理やBTS、ドラマから韓国に関心を持つのは、とてもいいことです。そして、そこから一歩進んで、日本と韓国の間歴史やマイノリティーの問題などにも目を向けることにつながれば、もっといいなと思います。

韓国に行ったことのある人が書いている作品には共通点があります。国と国とが緊張している中、ドキドキしながら現地に行くと、「日本で見聞きしたのとは大違い。本当に親切にしてくれた」と、みな書いています。「百聞は一見にしかず」。同じことわざが韓国にもあります。旅の再開を待ち望みます。





## 審査評

### 韓国語エッセイ・旅行記部門

審査委員 李允希 [東京成徳大学教授]

作品コンテストの応募締め切りの8月の22日が近づくと、私は少し不安になっていました。今年は昨年よりも日韓関係が良くないと思っていましたので、韓日交流作品コンテストに応募して下さる方が大幅に減るのではないかと思っていたからです。



数日後、韓国文化院から届いたメールを見て、思わず「わー！」と声を出してしまいました。応募者数が過去最多を記録した去年をあっさりと更新してしまったのを目の当りにしたからです。なんともその数字を確認しながら、日韓の人々の絆を一時忘れかけていた自分がすごく恥ずかしく思えました。作品を読んでいくと、今度は皆さんへの尊敬の気持ちと日韓が共存できる明るい未来への希望で胸がいっぱいになりました。応募して下さった皆様にはお礼を申し上げたいと思います。

今年の作品は新型コロナウイルスの影響が長引き韓国に行けない日々が続いているせいか、韓国旅行や料理、韓国の人々の情を懐かしく思う気持ちがある作品からにじみ出ていました。日韓を行き来できない時間が長くなればなるほど、お互いを大切に思う気持ちが強くなっていくことを多くの作品が改めて気付かせてくれました。こんな厳しい時だからこそ皆様の一作一作はとても輝いていて、審査員の私達を感動と笑いに誘ってくださったのだと思います。特に食をテーマとしたエッセイが多く、私も好きな料理がテーマになっている作品もありましたので、お腹がぐうぐうと鳴りっぱなしの状態でした。

밥 먹었어요? 「ご飯食べましたか。」というあいさつの言葉が含んでいる韓国の人々の情を書いた作品は、温かいスープへの描写が素晴らしく、積もった雪のように凍り付いた胸が一瞬にして溶けていく様子が見事に表現されていました。また、外出の厳しい今だからこそ、旅行先をテーマにした旅行記よりもインパクトのある作品がありました。恰も韓国にいるみたいに韓国料理を作って집콕도 한달이 「おうち時間の渡韓あそび」をやりながらも、それが現実になってほしいと願う切実な思いが文の隅々に表れている作品もありました。

小川のような우리「私達」の小さな出会いや思いは川になり、いずれ日韓を結ぶ海へと流れるので、今の悪循環の日韓関係を好循環へと変えられるのは私達を作る飛び石であることを綴った作品にはたいへん感動しました。

「闇は光に勝てない!」は希望を与えてくれる言葉でした。日韓が共存できる明るい未来への希望で胸がいっぱいになりました。

### 韓国語エッセイ・旅行記部門

審査委員 南潤珍 [東京外国語大学准教授]

今年も韓国語のエッセイ部門(一般・中高生)と韓国旅行記部門の審査をさせていただきました。2年目に入ったコロナ禍の中のコンテストであるにもかかわらず、これまでで最多の応募があり、内容面でも優れた作品が多くあったことで大変うれしく思います。



韓国語エッセイ部門のテーマは、「私の好きな韓国料理」、「私が感じた韓国」、「私が考える韓日交流」でしたが、中高生部門、一般部門ともに「私の好きな韓国料理」に関する作品がもっとも多かったです。単に料理の味や作り方を述べるのではなく、その料理と一緒に味わった人とのつながりや考えを綴った作品が多く、楽しく読ませていただきました。

こうした作品の中から入賞作を選ぶことは、いつも難しいことです。選考の過程では韓国語の正確さ・自然さも基準の一つではありましたが、より重点をおいたのは以下の二点でした。まずは、まとまりのある文章であることです。与えられたテーマを自分の経験や伝えたいキーワードと上手く結びつけた、読みやすく筋の通った作品を選ぶようにしました。二つ目は、伝えようとするメッセージを自分の言葉で発信していることです。個性的な文章を書くためには、身の回りの些細なことに目を向けること、世間で言われていることを自分の目で見直し、深く考え、再整理することが必要です。今回、このような要件を満たした作品が増えたので選択するのは大変でしたが、大変楽しい時間でした。

中高生部門で選ばれた作品には完成度の高い作品が多くみられました。料理を通じて深い「国情」を感じることで拒食症やアレルギーを乗り越えるようになった経験が軽快な文体で述べられ、またその経験が人への信頼や将来の自分像に発展していく様子が上手くまとめられています。他にも自分の成長と韓国食べ物・韓国人と交流を自分のことばで丁寧にまとめた作品が多くて、審査というより、読む楽しみを実感したことに感謝です。

一般部門においては、韓国の有名な小説の場面とお母さんの韓国料理の思い出を実際に味わった「○○○」の味とつなげ、家族への温かい気持ちをまとめた最優秀作をはじめ、あまり知られていない料理や食材を新しい発見につなげた作品が多かったことが印象的でした。

韓国旅行記部門は、多くの作品から、コロナで旅行ができなくても今ここで韓国を楽しむ方法を探る姿や昔の旅行の思い出を今の自分とつなげる様子が伝わってきてとても勇気づけられました。単に「ここが良かった」だけでなく、その経験が今の自分にどう生かされているのかを自分の言葉で上手く表現しています。

以上、審査評というより感じるままを記しておきました。これからも皆さまの韓国語力、ましては韓国力がもっと深くなっていくことを期待します。

ありがとうございます。



2021  
韓日交流  
作文  
コンテスト



## 審査評

### 韓国語エッセイ・旅行記部門

審査委員 武井一〔東京都立日比谷高等学校教員〕

まずは韓国語で書こうとしたことに敬意を表したいと思います。自由にあやつれない外国語で挑戦しているからです。韓国の人に読んで貰いたいという気持ちもあったのでしよう。



どの作品も楽しいものでした。これまでよりも自分の言葉で語ろうとしているものが増えたように思います。抽象的な言葉や型どおりの言葉をそのまま使うのではなく、自分の体験に照らして具体的に書いているものが多かったのです。印象に残っているものの中に「近くて遠い韓日」という決まり文句の意味を、自分なりに解釈して書いていたものがありました。

その上で、気づいた点をいくつか書きたいと思います。

まず読者に伝えるためには、言いたいことが相手に伝わらなければなりません。そのためには与えられたテーマをそのまま使うのではなく、対象をより絞った方が、言いたいことをまとめやすくなるようです。交流の「交流」そのもので書いたものより、具体的な「場面」に絞った作品の方がうまくまとまっていたものが多かったからです。

テーマと伝えたいことが一見飛躍しているように見えるものも相互に関連していれば面白い作品になります。韓国で食べたことから韓国への思いに展開した作品がありましたが、予想外の展開に息を呑みました。

文章の背景を丁寧に書いて欲しかったものもありました。「日韓関係を良くするために留学生の力が必要だ」という場合、「どうしたら」日韓関係を良く出来るか、そのために「なぜ」留学生の力が必要なのかを書いてあれば、より説得力が増します。「韓国の食べ物を食べたら韓国人の情を感じた」というものも同様です。韓国で食事したことと情が投降者の中でどのように結びついたので、ご本人の体験や心の動きを知りたくなくなりました。

これらを踏まえた上で論旨が一貫する必要があります。タイトルと文章の関連が分からない。時間軸が前後するのだが、その関係が分からない。それまでの文と結論が繋がらない作品が散見されました。文章の流れが途切れてしまうのです。なぜそのように書いたのか、何か意図があってそうしたのか考えてしまうのです。それを避けるためには、まず日本語で書いて推敲してから韓国語に直すといえでしょう。語順だけでなく、論旨の展開の仕方とも日本語と似ているので、日本語で論旨が一貫していれば、韓国語でも論旨が一貫するからです。

実はこのような作業を通じて自分の考えも整理できます。私もたびたび経験しています。それまで曖昧だった考えが、はっきりと像を結ぶのです。自分の心の再発見の旅とも言えます。

このような機会を通じて、自分の再発見の旅も楽しんでもらえれば嬉しく思います。

### 川柳・俳句部門

審査委員 兼若逸之〔元東京女子大学教授〕

今年はコロナ禍がなかなか収まらず、俳句・川柳もその影響を大きく受けていました。行きたいところにも行けず、美味しいものもなかなか食べに行けず、会いたい人にも会えず、本当に大変な一年でした。こうした中でいろんな問題があったとはいえ、とにかくオリンピック・パラリンピック、さらに高校野球が無事終わり、ほっとした人も多かったことでしょう。



旅行に出かけられなかった人はかつて訪れた場所を思い出したり、家でできることを探したり、勉強に励もうと新たな覚悟を持たれたりした方もいらっしゃると思います。

コロナ禍の中、できればある程度気持ちに余裕をもってほしいという希望はあっても、なかなかうまくいきません。優秀句に選ばれた「分かち書き文字もソーシャルディスタンス」はハングル文の分かち書きをコロナ時代の「ソーシャルディスタンス」に掛けたウィットに富んだ句となっています。ハングルができたときは分かち書きはありませんでしたが、その後書き方の規則も細かい部分まで改正され、現在に至っています。

もう一つの優秀句「ミヤネヨ (미안해요)」とその一言で仲直り」は平凡な句のように思われますが、「미안해요 (ごめんね)」は日常生活ではなくてはならない表現です。サークルや部活動、夫婦やカップル、団体や組織においても、この一言があればどンドン望ましい方向に向かうでしょうし、この一言がなければギスギスした関係がさらに不仲な関係へと向かうことになるでしょう。「ミヤネヨ」とさきらつというので、相手を大切にしたい気持ちがにじみ出ますし、人と人のつながりをより強固にします。この実践の結果が野球部を甲子園出場に向かわせたり、オリンピックやパラリンピックで結果を出したりする力となっているのであれば、魔法の言葉と言えるでしょう。

最優秀の句「秋深し韓屋村の電子錠」は松尾芭蕉の「秋深き隣は何をする人ぞ」を連想させます。芭蕉が亡くなる2週間ほど前に作られた句で、解釈も時代によって変わってきているようです。「韓屋村」とはソウルの「北村」あたりではないかと想像されます。「電子錠」の最も一般的なものは8桁の暗証番号を押して開ける金属製の鍵のタイプです。暗証番号は「비밀번호 (秘密番号)」と言いますが、昔ながらの韓国の伝統的な木造建築になぜ「電子錠」が付いているのでしょうか。この句の作者はここに時代の変化と驚きを覚えたのでしょうか。伝統的なものと現代的なものとの対比、そしてその二つの微妙で危うい関係を「秋深し」という芭蕉の句にのせて詠っています。私たちの心はどうすれば開くのでしょうか。

自分の句の方が出来がいいのにと思っている方も多いかと思いますが、次年度にもぜひ応募をお願い致します。





# 審査評

## 川柳・俳句部門

審査委員 曹喜澈 [元東海大学教授]

韓国語川柳・俳句部門は723作の応募がありました。素晴らしい作品をお寄せくださり、ありがとうございました。昨年同様、新型コロナを題材にした作品が数多く見られ、コロナ禍の中、大変な時間を過ごされていることを改めて思い知らされました。

最優秀賞に選ばれた、池田日向子さんの

「봄비는 전철 빈 노약자석에는 한국인의 정」

(混んでいる電車 空いている老弱者席には 韓国人の情)

この作品は、混んでいる電車の中で、若い人がこれから乗ってくるかも知れない高齢者や体の不自由な誰かのために、あえて席を空けておく、そんな光景を上手に浮かび上がらせています。

また、優秀作の

「뒤돌아보면 한 움큼 쥐어 주는 단골 아줌마」(清水洋子)

(振り返ると 手のひら一杯のおまけ 行きつけ店のおかみさん)

は、市場の風景がいきいきと描かれています。行きつけのお店で콩나물(豆もやし)でも買ったのでしょうか。帰りがけに、店のおばさんから声をかけられ、振り返ったら手のひら一杯のおまけ!? 韓国の市場ならではの優しく威勢のいい女将さんとのやりとりが目に浮かびます。

そして、こちらも優秀作に選ばれた、

「우리 고양이 밥 달라고 조르면 나는 예~전하~」(今西慶子)

(うちの猫から ご飯をねだられると 私ははい〜殿下〜)

もなかなか軽快で面白い作品でしたね。飼猫からご飯をねだられて「예~전하~」と答えるということですが、猫を王様扱いで「전하(殿下)」と呼んでいるようですね。

今西さんの作品では、もともとの「우리 고양이가 밥을 달라고 조르면」から、助詞の「가」や「을」が省略されていることがわかりますね。韓国語川柳・俳句でもどのように言葉をしぼり、またそぎ落とすかがカギになりますが、多くの場合、助詞を落とすことで句が引き締まり、また、リズム感もよくなります。少なくとも散文のくだけりを取ってつけたような印象は避けるべきでしょう。

また、佳作に選ばれた、

「잃었던 일상 코로나가 알려 준 소중한 친구」(後藤将司)

(失った日常 コロナが教えてくれた 大事な友だち)

「알고 싶어요 마스크에 가려진 너의 진심을」(田中葵衣)

(知りたいです マスクに隠された あなたの真心を)

「보름달이 뜬 하늘을 올려 보며 또 서울 생각」(竹野瑠衣)

(満月の空を 見上げながら、また、ソウルを想う)

「간절한 원함 평범한 일상생활 그저 그것만」(井上和恵)

(切実な願い、平凡な日常生活 ただそれだけ)

この4作品もいずれもコロナ禍での日常を上手に詠んでいます。

今回の韓国語川柳・俳句部分は倍率にして30倍近い競争になってしまいましたが、審査する立場からしても、みなさんの一つ一つの作品を紡ぎだすために、どれだけ心砕かれたらと思うと、審査も心苦しい作業となりました。

今年、残念ながら入賞できなかった方たちも来年もう一度挑戦してみてください。「一日一句」のつもりで書き続けていると韓国語も上達し、お気持ちも研ぎ磨きされることでしょう。화이팅!

(日本語訳はいずれも評者による)



# 作品集



## 最優秀賞

# 私の好きな韓国料理

瀬戸ゆず果〔広尾学園中学校〕

私のダイエットはいつも三日坊主。あの時もそうだった。サクサクでピリ辛な韓国チキンの妄想が私の計画の邪魔をした。このチキンと初めて出会った時の感動は今も忘れない。ボリューム満点で、程よい塩加減、頬張った瞬間のサクサク感、そして鶏肉の柔らかさはたまらない。なんて一人でニヤニヤと考えていた。

そんな私を不思議そうに見ていた父にこう言った。

「お父さん、サクサクなチキンを食べにいこう。」

考えてみれば、これはとても久しぶりな父との外出だった。だからお店選びも楽しかった。結局、以前仲の良い先輩と行った韓国料理店に入った。そこには親友と訪れたこともあった。その店に入るといろいろな思い出が蘇ってきた。恋バナをしたこと、お腹いっぱいなのに親友と意地をはって食べ続けたこと、好きなアイドルについて延々と語ったこと。そんなことを考えながら、父と席についた。父は韓国料理店に来るのは初めてのようで、ビールを飲めれば良いと言っていた。私はそこではお決まりのコーラを頼み、父のビールと乾杯した。氷がカラン、という。最初に種類豊富なおつまみが出てきて、父はビールとそれを楽しんでいた。私は、もちろんチキンがたくさん入っているUFOチキンを頼んだ。サクサクのチキン、甘めのチキン、ヤンニョムチキン、チーズボール。待ってましたー！父と一緒に分け合いながら食べた。父は想像以上に楽しんでくれて、「お、このチキンも美味しいぞ」「これはどんな味付けなんだろう」などと言っていて、とても楽しい時間を過ごした。お腹が満たされてきた頃、普段はできない話をした。父と母の馴れ初め話を聞いて幸せな気持ちになった。父の母への愛を感じた。私が小さい頃、暑い日によく父と虫取りにいたりキャッチボールをしたりした思い出話も盛り上がった。

父はサムギョプサルも食べようと言ってくれたのだが、UFOチキンで私たちはお腹いっぱいになってしまったので、また次回となった。その次回が待ち遠しい。しかし今度は本場韓国へ食べに行くのもいいなあ。

そして帰りには父の気に入ったヤンニョムチキンを買って、ついでにラッポギやラーメンなど沢山買ってしまった。こうして家では一週間ほど韓国料理が続いたのであった。そして我が家は韓国料理の大ファンになり、それだけにはとどまらず、家族で韓国に興味を持つようになり韓国ドラマや韓国のアイドル文化などにどんどん惹かれていった。

こうして私のダイエット計画は夢も終了したのだ。

振り返ってみると、私の韓国料理の思い出は素敵なものばかりだ。大好きな人たちととても楽しい時間を過ごしていた。父や親友、親戚や先輩。そしてUFOチキンのおかげで、韓国の素晴らしい文化を知ることができた。私に多くのものをもたらしてくれる、ハイカロリーで最高に美味しいサクサクなチキン様。これからもお世話になります。

# 優秀賞

## 私が考える韓日交流

鈴木ひな〔明星高等学校〕

私は、ごく普通の日本人高校生だ。韓国人の血が入っているわけでもなく韓国に留学経験があるわけでもない。韓国料理とk-popが好きで一般人だ。

そんな私が「韓日交流」なんてものに興味を持ったのは自分の周りの人々が思う韓国像に疑問を感じたのがきっかけとなっている。

例えば、私の祖母は韓国が嫌いだ。私がk-popアイドルの話をする顔をしめ、テレビに韓国の話題が映ると「まーた韓国だ。同じ日本人としてなんで韓国を好きなのか不思議よ」という。そんな祖母だが、キムチやビビンバが好きだ。薬局でk-popが流れると「この曲最近よく聞くわね、はまっちゃったわ」という。違和感を感じた私は祖母に何で韓国が嫌いなのか理由をたずねた。すると、「韓国は竹島問題もあるし慰安婦とか徴用工問題は日本がやるべきことちゃんとやってるのに解決しないのよ、好きになんてなれないわ」という。挙句の果てに私に「韓国なんて好きになるもんじゃないわよ。やめときなさい」と言い始めた。これを聞いて私が思ったのは「日韓の歴史問題はあっても韓国の文化を嫌いになる理由にはならない」ということと、「大人が子供に向かって他国のことを好きになるなど言うてはいけない」ということだ。

特に二つ目に関しては、日本では高齢の方に韓国が憎い・嫌いだという感情を持っている方が多くみられるなか、子供や孫に韓国に対するマイナスイメージのみを伝えていってしまうことで韓国と交流しよう、関係を改善しようという力が弱まり現在よりも日韓関係が悪化する可能性がある。そこで取り入れるべき考えが一つ目に挙げた意見だ。そもそも、日米間でもWW2での核問題や米軍基地問題があるにもかかわらず交流は盛んで両国の印象も悪くはない。そんな中若者の間での韓国ブームの影響で日本は韓国にまつわるものであふれている。この状況で韓国に一切触れないで過ごすほうが難しいと思う。食品に関しては調味料、キムチなどの料理。衣料品に関しては大手のファッションブランドで韓国を意識した商品開発をしていないブランドはないだろう。韓国のものだからといって頭ごなしに否定して忌み嫌うのではなく、慣れ親しんだ外国文化として認め、広めていくべきだと思う。

歴史的背景を持ちいまだに解決できていない日韓問題に関しては、これだけの長い期間議論が続いていることからわかるように簡単に両国の意見をまとめて解決するような問題ではなく、解決には政治的権力が必要なことも事実だ。ただ、その問題を解決するまで日韓で限定的な鎖国状態をつくるというのはお互いの国にとって不利益しかない。

エンターテインメント、食、ファッション…様々な分野での文化交流をすることで両国の国民が親和性を持ち良好な関係を築くことができこそ、政治的な面での関係を良好にする兆しが見えてくると私は信じている。



# 優秀賞 ヤクソク

小松崎有美〔埼玉県〕

「目標は看護師になることじゃないよ。その先にある患者さんの笑顔だよ」

看護学校を卒業したあの日、私たちは指切りを交わした。彼女は在日韓国人。卒業後はそれぞれ別の病院に就職し、三年前から彼女は地元ソウルで働いている。互いに忙しく会う暇もないが、それでも繋がっていると思えたのはあの日の約束があったから。

だがその忙しさに拍車をかける出来事が起こる。新型コロナウイルス感染拡大だ。私の病棟にも重症患者が次々と運び込まれ、一時は受け入れをストップさせるほど。

「傍にいてほしい」

「苦しい」

「死ぬのが怖い」

鳴りやまないナースコールはまるで患者の叫び。患者さんの震える手を取る。きっと助かると信じた。助かってくれと祈った。だけど懸命な看病も虚しく、何人もの患者さんが天に召された。最後まで家族に会えなかった辛さ。それを思うとやりきれず、トイレに行くふりをしてワンワン泣いた。ウィルスに対し私たちはほとんど無力だった。

「もう死んでしまいたい」

一ヶ月ぶりの休日に私が向かったのは心療内科だった。診断はうつ病。原因は過度のストレスと疲労だった。休職か。はたまた退職か。そんなことを考えていた矢先、待合室のテレビに見慣れた風景が映った。ソウルの病院だ。ソウル市内も患者が急増し、医療がひっ迫していた。何だか急に彼女の事を思い出して私はメールを送ることにした。するとすぐに彼女から返事が来た。しかしそこで彼女が濃厚接触者として二週間の自宅待機であることを知った。彼女はメールの中で「悔しい」と言った。命に寄り添えないことが悔しいと。「だけど私たちにコロナは治せないじゃない。無力だよ」と反論すると彼女は怒った。「私たちの仕事は病気を診るんじゃなくて心を診ることよ」

その言葉にハッとした。私はすっかり忘れていた。十六年前の約束。私たちのゴールは患者さんを笑顔にすることだった。「そばにいて欲しい」や「寂しい」という患者さんの心に寄り添えるのはナースだけなんだ。

彼女は、最後、カタコトの日本語で「ヤクソクよ」と言った。日本語の「約束」と韓国語の「약속 (ヤクソク)」は発音が同じ。それは私たちが深いところで結びついているようにも思える。

次の日病棟に向かう足は軽かった。空は一段と青く見え、患者さんの笑顔はまるで太陽のように見える。それは自分が笑顔だからだと今更気づかされた。笑顔がつながり、元気がつながる。人の命はそうやってつながるものなんだ。

「必ず元気になって退院しましょう！ヤクソクですよ」

そう笑うと患者さんも笑った。明るく交わる二つの笑顔は、きっと、彼女にも届いているはずだ。

# 佳作

## 私が考える韓日交流

高橋遥名〔鳥取県立境高等学校〕

私の通っていた中学校では、毎年韓国から交流のため中学生が来ていました。直接関わったのは、1年生の時に給食を一緒に食べた時だけでしたが、その数十分のために友達と一緒に韓国語を調べて練習をしました。その時初めて韓国の人と関わったのですが、勉強した韓国語が通じた時はとてもうれしかったです。また、来てくれた韓国の中学生たちも日本語を勉強してくれていて感動したのを覚えています。正直、交流をする前はメディアの影響もあって韓国に対して良いイメージを持っていなかったのですが、実際話したら自分のイメージは偏見だと気づきました。その後私は韓国語を独学で勉強し始め、K-POP やドラマを通して韓国文化にも親しみ、高校では韓国語の授業を選択して現在も勉強を続けています。

そんな私にまたチャンスがやってきました。高校2年生の時に、韓国の高校生と Meet を通して交流する機会を得たのです。中学生のころとは違って韓国語も少し話せるようになっていたので、お互いの趣味の話など楽しく話すことができました。中学生の時よりはより深い交流ができました。

私はこのふたつの交流を振り返って、人が関わる上で大事なことは相手を知ろうとすることであり、それは国を越えても、たとえ国同士の政治的に関係が悪くても変わらないと思いました。また、韓国の文化を勉強しながら、見た目や文化が似ている一方で、礼儀作法でも日本と韓国では真逆のものがあったりすることに面白さを感じます。そういう違いを知るたびに、ある先生が言った「文化は国で違うのではなく、一人一人が違うものだ。」という言葉思い出します。異文化理解というのは少し難しいように聞こえるかもしれませんが、結局、文化は個性であり、相手の個性を受け入れることだと考えます。そしてそれは多くの人が日常生活において周りの人に行っていることだと思います。

韓日交流だからといって難しく考えたり、日本人、韓国人だからといって文化の違いすらも拒否したりするのではなく、お互いが一人の人間として関われば、そこに国は関係なくなると思います。目の前にいる相手のことを知り、自分と違うところを受け入れるのです。私は韓日交流を通してそれに気づくことができました。そして私のように韓日交流を通して自分の考えに偏見があったかもしれないと気付く人が増えれば、両国の関係は良い方向に向かっていくと思います。



# 佳作

## 私のアイデンティティ

徐茉那〔鷗友学園女子高等学校〕

最近、私はとてもやるせない気分になった。ネット上の韓国関連の記事に韓国人全員を批判するような内容のコメントばかりが載っていたからだ。どうして全員の人格まで叩かれる必要があるのだろうか、どうして私たちは仲良くできないのだろうか、私はそう思った。

私はもっと多くの人に知ってほしい。この世界には、本当に色々な立場の人がいるのだということ。現に私は韓国の血を8分の7、日本の血を8分の1引き継いで、私は韓国籍を持っている。でも、私は日本に住んでいて、日本の学校に通い、日本語は話せるが、韓国語は勉強中。お父さんのことはアッパと呼ぶけれど、お母さんのことはママと呼ぶ。はっきり韓国人、日本人だという人が多いけれど、本当は私のような複雑な立場の人も沢山いるということ。以前私は自分を恨んだ。自分がどうしてこんなにも複雑な立場なのか、もし世界中で何か大きな出来事が起きてしまったとき、私をかばってくれるのはどの国なのか。答えは見つかっていない。でも、私は答えを見つけなくてもいい。

私は自分のルーツで直接嫌な思いをさせられたことはない。でもだからこそ、顔の見えない誰かがネット上で、8分の7の私を否定したり、8分の1の私を否定したりすることは、私の一生答えの出ない疑問をさらに深いものにする。

私は、おばあちゃんやおじいちゃんが作ってくれるチャプチェやピビンバが大好きだ。韓国のアイドルの熱烈なファンでもあるし、韓国の文化もドラマも、可愛い雑貨も大好きだ。でも私は、日本のお寿司やたこ焼きも大好きだし、日本語の歌も大好きだ。何より、日本人の友達が大好きだ。私の仲の良い友達は、私のルーツを理解してくれていて、大学生になったら一緒に韓国へ旅行に行く約束もしている。どちらの国も好きだからこそ、日本の韓国を批判するコメントや、韓国の日本を批判するコメントがナイフとなって、深く胸に突き刺さる。

私は今、15歳の高校1年生だ。大きくなって、沢山のことを知るようになった。将来就きたい職業もできたし、将来の過ごし方も考えるようになった。私は複雑な環境を持っているけれど、今の環境、そしてルーツに感謝している。私は今の私だからこそ、世界中に様々な背景を持った人々が大量にいることを、複雑な立場の人々の思いを、知ることができた。もしこのルーツを持っていなかったら、私もネット上で複雑な立場にいる誰かを傷つけるような行為をしてしまうかもしれない。

今、韓国と日本の間にはとても大きな、そして流れの速い川がある。その川に橋を架けるには、お互いの協力が必要だ。様々な背景を持った人々も快く渡ることのできる橋を架けなければならない。

いつ橋はできるだろうか？沢山の人が世界の多様性に本当に気が付くのはいつだろう？お互いの歴史を乗り越えて、いつかきっと一緒に橋を架け、橋の真ん中で手を取り合ってくれることを、私は願っている。

## 佳作

## 韓国語を学び日韓の深いつながりを思う

吉田豊〔三重県〕

60ならぬ70の手習いで、韓国人の先生からハングルの手ほどきを受けることになった。きっかけは、障がい者との音楽活動をライフワークとする私が、韓国の障がい者バンドと交流の機会に恵まれたことである。私たちは名古屋と伊勢で合同コンサートを行い、その勢いで台湾公演もご一緒した。次は韓国で、と準備が始まり、私も多少とも言葉を習得したいと考えたのだ。

だがこの交流イベントは習い始めのきっかけに過ぎない。私には韓国語に向かうもう一つ別の理由があった。早逝した娘は一時期韓国語に熱中し「お父さん、日本語とすごく似てるんやよ。」としきりに言っていた。当時娘の話に耳を貸すことはなく、そして何冊かの学習書が遺品となってしまった。彼女の韓国語への興味を当時意に介さなかったことは、私の中で悔いの山の一つとして胸に刺さったままだったのだ。

習ってしばらくして、「걸리다 (かかる)」が最初の衝撃だった。時間が、服が、病気に、全部この語が使えるという。さらに 공부까지 했어요. (勉強までする) 나는 우동이다. (僕はうどんだ) と聞くに及んで、単語のみならず、言語の深層で通底するものを直感した。国が人を分かつ以前、私たちの祖先は、人々が行き交う同じ土壌から異なる言語を育てていったのではなかろうか、妄想は膨らむばかりだ。

これほど似通った感覚で言葉を使う民族同士にも拘らず、日韓間の溝は深く大きい。すぐ政治問題化する歴史認識は勿論、個人レベルの感情表現もまたそうである。私は学習をきっかけに韓流ドラマや映画に親しみ、ストーリーとは別に登場人物の人情を垣間見るようになった。人の思いは何も違わない。だがその言動は他者に対していかにも激しく、強く、濃厚である。私たちとはDNAレベルでの違いさえ感じてしまう。

しかしよくよく考えてみれば、これは人と人との交わりの表面に過ぎない。誠実な交際が積み重なれば、分かり合え、リスペクトし合えることは言うまでもない。

日本での韓流ブームは、どちらかと言えば商業主義的な戦略もあって、残念ながら未だ表面的だと感じざるを得ない。ドラマや歌はお互いがお互いを知るための契機としては申し分ない。だが絶えずそこに政治が棒を差す。外交は、それぞれの立場を前面に押し出し、後には引けないものとなる。一方ソフトに映る韓流ブームも、しばしば一部のカッコよさだけが喧伝される。政治もコマーシャルイズムも一面的なイメージが強調されるという点で実は似た仕組みなのだろう。

単純ではない間柄の私たち。問題を一気に片づけることなどできない。表面の奥に踏み入り、あの音楽イベントで私たちが味わったような真摯な交わりを重ねるしかない。それは多少厄介でも楽しいことなのである。

ハングルを学んで私は国を分かつ以前の共通の基盤のようなものを強く感じ始めた。今なら娘と韓国語を巡っていくらでも話ができたと、という悔しさも噛みしめながら。



# 佳作 パンモゴッソ？

本田千景 [ICS カレッジオブアーツ]

大学に入学してから、韓国人の友達が多くできた。

彼らと過ごす中で私が感じた韓国がある。それは食への「意識」と食に関する「言葉」の豊さだ。

韓国の友人達は挨拶のように「パンモゴッソ？（ご飯食べた？）」と聞いてくる。

食べてないと答えると、「ちゃんと食べなきゃ！」と言われることもしばしば。

食事をしている私の横を通る友人は「マシッケモゴ（美味しく食べてね）」と声をかけてくれる。その他にも「たくさん食べてね」「一緒に食べよう！」のように日本にもあるような言葉でも、使う頻度がかなり違うのだ。

さらには、忙しく食事を抜き気味だった私を心配し家に招いて韓国料理を振る舞ってくれた友人もいたし、韓国旅行で一度だけお会いした友人の母が、一人暮らしの私を気にかけて国際便でたくさんのパンチャンを送ってくれたこともあった。

日本とは違う、韓国の食への意識と特有の言葉たち。私はそれらに触れたことで、心身ともに健康になっていった。

忙しく働く親の元、幼いころから食事を一人でとることが多かったからか私は昔から食に無頓着だった。お腹がすいていれば食べるけれど、すいてなければ一日一食の日もあり、栄養は元より、楽しんで食事をする機会も少なかった。誰かと一緒に食べる、きちんと食べて栄養を取る、そういった「食」に関する機会と関心が低かったため、体調や心を崩すことも少なくなかった。そんな中、多くの韓国人に出会い、一日に何度も食に関する言葉をかけられるようになったのだ。彼らの言葉で思い出したかのようにきちんと食事をする日が増えていった。一緒に食事をしてくれる友人も多く、食事をするのが楽しくなった。また、「パンモゴッソ？」「マシッケモゴ」「マニモゴ」これらの言葉を聞くと、「誰かが私のことを気にかけてくれている」という気持ちになり、心にまで栄養が行き渡るように感じた。

そうして韓国の友人達と過ごしていくうちに、整った食事をするようになり、私は以前と比べて活力的になっていった。よく食べてこそ、美味しく楽しく食べてこそ、人は身も心も元気でいられる。食べることは生きることに直結しているから重要なことなのだと、段々と「食べること」に対する意識も大きく変わっていった。

韓国人の彼らにとってはこの意識が当たり前で、「パンモゴッソ？」といった食に関する言葉たちにも挨拶以上の意味はないのかもしれない。しかし外国人の私には、韓国の食べることに対する意識や言葉がとても素敵なものを感じる。特に言葉には相手の心と体を思いやる、そんなあたたかな気持ちが含まれているようで私はとても好きだ。

私が感じた韓国の食への「意識」と食に関するあたたかい「言葉」たち。日本でも浸透し、より多くの人が健康に過ごせる社会になるといいなと思う。

# 最優秀賞

## 「ふるさと」への旅

長田秀樹 [大阪府]

「自分はそこに居た。」その確認のための旅がある。かつて通った学校を、今は自分を知る人がいなくなった街を人々が訪れるのはそのためだろう。郷愁と共に自分がそこに居たことを確かめる事を、人は本能的に求めているのかもしれない。

韓国人の父と日本人の母に育てられ、それを隠して今日まで日本人として生きてきた。幼い頃我が家では韓国の事を話す事は禁じられていた。だから父も韓国の話をしたことはない。そのような私が自分の原点がどこにあるのか気になりだしたのは、残りの人生が短くなった最近である。日本で原点は容易に見つかり足を運ぶ事ができたが、韓国のそれはどこなのか…永年わからないままだった。一昨年末、亡くなって10年経った父の仕事場を久しぶりに掃除していた。仕立屋だった父が遺した大判の名刺ホルダー。取引先の名刺が収まったその一角に父の外国人登録証が納められてあり国籍出生地と書かれていたのは泗川だった。そしてそこ韓国旅行の目的地になった。

金海空港について西部バスターミナルまではそれほど難しくなかった。しかし、バスターミナルで目的の泗川行きの長距離バスが見つからない。たどたどしいハンゲルで道を尋ねる日本人をいぶかしげに見る人々。諦めてショッピングでもしようと近くのファッションビルに向かうと、その1階にバスターミナル。おっ！と思う間もなく出発まで3分の表示。あわててチケットを購入。運転手に目的地を確認し、泗川についたら教えて欲しい旨を伝えた。わかったという一言に安心し、車窓に写る風景を目に焼き付けようとした。怖いほどのスピードで走るバス。想像以上にかかる時間。朝からの移動距離に、旅の疲れが比例して募る。冬の日暮れは早く、車窓の風景もすぐに黄昏色になる。心細い気持ちになりかけていたとき、運転手が泗川に到着したと教えてくれた。想像していたよりも静かなバスターミナル。まばらな人影。扉を押して道に出て、歩みを進める。収穫が終わった畑が眼前に広がる。航空宇宙産業の街と事前に調べていたのとは違う印象。収穫が終わった畑に静かに沈もうとする夕日が似合う街。鞆から父の遺影を取り出した。苦勞続きの人生だった父親。仕事一筋に歩んできた優しい父親。広がる景色を父親に見せていると、どうしたことだろう、私は泣いていた。声をあげて泣いていた。葬儀から今日まで一度も父親のことで泣いたことが無かった私が、遺影を胸に泣いていた。自分の源の一つがここにある。異国に自分のルーツがあることを改めて感じずにはいられなかった。グルメも観光も縁の無い初めての韓国旅行。しかし、この旅ほど忘れがたい韓国旅行をこれからすることはないだろう。

## 優秀賞

# 100年後の私たちは

本村沙也〔大阪府〕

「三月一日は韓国の独立記念日百周年です。反日感情が最も高まる時です。日本人渡航者は、十分に注意しましょう。」  
ちょうど二〇一九年の三月一日からの三日間、韓国への旅行を計画していた私と友達は、このニュースを見て凍りつきました。  
一時は旅行をキャンセルしようかとも思いましたが、静かに、迷惑をかけないように過ごすということを決めて、旅行に行くことにしました。

私は、自分が今までこの歴史を知らずに生きていたということに、衝撃を受けていました。  
今から学び直しても遅くないだろうか…。旅行への期待感と、自分の無学さへの反省、申し訳無さが入り混じった気持ちで、関西空港を発ちました。

仁川空港に降り立った私たちは、近代的で綺麗な建物、異国に立っているという事実にわくわくして、小声で喜びを分かち合いました。

仁川空港からホテルのある鍾路5街駅までの切符を買おうとしていると、券売機のシステムが分からず戸惑ってしまいました。  
するとそこへ、駅員さんが話しかけてくれて、韓国語も話せない私たちの身振り手振りを見て、切符の買い方を教えてくれました。  
私たちは頭を下げながらカムサムニダを何回も言い、切符を買えたこと以上の喜びと安心感を噛みしめました。  
そのあとも困ったことがあるとすぐに助けてくれる人たちがいて、何度もカムサムニダを言う場面を経験して、そのたびに心が温かくなりました。

ホテルに到着して、人々の優しさで心が解れた私達は、サムギョブサル屋さんのお店に行ってみることにしました。  
覚えたての韓国語、チャルモッケスムニダを言って食べ、あまりの美味しさにマシソヨ！を連発していました。

しばらくすると、一人の女性が私たちのテーブルまでやって来て椅子に座りました。  
そして、「こんにちは！私は日本が好きで、日本語を勉強しています。」と言って、話しかけてくれ、そこでもたくさん話をしました。  
「あそこにいるのは、私の姉です。」と言って、その方がお店の奥にいるおかみを指差しました。

韓国のサムギョブサルの食べ方を知らない私たちに、身振り手振りで教えてくれた方です。  
「これは、私の姉からのサービスです。姉は韓国語が話せないの、私に渡してきてくれと頼みました。」と言って、ペットボトルのコーラを手渡してくれました。

私はそのコーラを見つめながら、そのコーラに込められた心を感じて、韓国と日本という国単位の大きさでは見えない本当に温かい心を感じて、胸が熱くなりました。

私たちはもう一生味わえない味のコーラを大切に飲んだあと、韓国語を検索して、そのおかみさんに感謝をたくさん伝えました。  
おかみさんは照れた顔で笑いながら何度もうなずきました。

私の韓国の旅行の思い出は、こんな温かい人たちとの思い出でいっぱいです。

100年後の私たちは、自分にできる小さな思いやりで、お互いを少しずつ温めています。

# 優秀賞

## 魔法の言葉

郡司二奈〔東京都立大学〕

私は現在パスポートを2つ所持している。それらは日本と韓国のもので、私は世に言う「ハーフ」ってやつだ。日本で生まれて日本で育っている私だが、幸いにもハーフであることでいじめや差別は受けたことは今までで一度も無かった。もっと言えば私は自分のみんなと少し違う特別な境遇が好きだった。典型的なB型である。しかし、韓国へ行くとその自信は一気に低下した。その理由は韓国に行くと完全なる外国人扱いを受けるからだった。これは日本で生まれ育っている以上必然的なことであつたが、韓国の生活を知らず、言葉は喋れるとしても読み書きができなかった私は、日本で感じていた特別感ではなく劣等感を感じていた。このように、日本に居れば少し特別な自分と、韓国に居れば外国人な自分のアンバランスな環境が私の存在を少々「複雑」にしていた。そんな少し複雑な感情から私は中学生頃から韓国人としても認められたいと思うようになっていった。そんな感情を持ったまま、私は日本の大学へ入学し、そこで出来た友達と韓国旅行に行くことになった。親と一緒にではない韓国旅行はこの時が初めてだった。頼る相手がいない、更には一緒に行く友達の中で韓国に行ったことある子が居ないということが私に韓国ハーフとしての勝手な責任感を持たせた。その影響か、私は直ぐに韓国の文化やその意味、観光地やその歴史をネットで全て漁った。そして、韓国に到着しサムギョプサル屋さんに行けば、箸の置き方から食べ方を教えてあげて、移動では交通カードの買い方、地下鉄・バスの乗り方など全てをサポートしてあげた。そんなある日、ホンデへ遊びに行きみんなで占いをしてもらった。占い師は日本語が出来ず、友達3人分の占いを隣で全て翻訳してあげた。友達の占いが全て終わり私のターンになると、その占い師が私の手を取って「大変なのにお疲れ様。ありがとう。」と言ってくれた。これは今でも鮮明に覚えている。私はこの些細な言葉がとっても嬉しかった。何故なら、韓国人として認められた気がしたから、また、外国人として扱われなかったから。この占い師の不意な言葉が、今まで複雑な感情に縛られていた私を解してくれるように感じた。私はあと少しで国籍を日本と選択する時が来る。私が韓国国籍を選ばなかったとしても私のルーツはずっと日本と韓国であり、日韓戦ではどちらかの国にいるかで応援国が決まることは全く変わらないのである（多分）。私の思い出宝箱に今までの韓国パスポートを追加するのがとても楽しみである。



## 佳作

果実酒のように熟していく  $9.23 \times 10^{-16}$  の確率の縁

松村友里加〔大阪府〕

この原稿を書いている日は偶然にも6月25日だ。韓国戦争が起きた悲しい歴史の一ページの日である。韓国の方々からすると6.25戦争と聞くと様々なことが思い浮かぶでしょうが、私はピ・チョンドック詩人の「縁」が思い浮かぶ。「縁」は、日本統治時代から6.25戦争に至るまでの韓国激動の時期に会った若きピ・チョンドックと日本人女性、朝子との思い出を綴った韓国生まれ育ちの方なら誰でも知っている随筆である。

ピ・チョンドックの「縁」を思い出しつつ自分の縁についても考えてみた。日本の人口は約一億三千万人で、韓国のそれは約五千万人だ。思ったより目が丸くなるほどの数字の中で私たち5人は出会った。それも空をふわふわと漂う風船飛行中に。

コロナがこの世の中を覆う前、運良く高校卒業旅行として韓国に行くことができた。様々な所を見回した後、ロッテワールドに訪ねて行った。日本にはない初めて見るアトラクションが多く、新鮮だったのだが、その中でも一番印象深かったものは「風船飛行」だった。私たち一行三人は韓国の女性お二方と一緒に乗ることになった。ぎこちない挨拶を交わした後、私は素早く視線を逸らした。しばらくしてから、その方達は『일본에서 오셨어요? (日本から来られたのですか。)]と韓国語で声をかけて下さった。その当時私は塾で韓国語を学んでいたため、『네, 일본에서 왔어요. (はい, 日本から来ました。)]と何とか答えられた。風船飛行から降りる前に私たち五人は写真を撮り別れた。そして数時間後、他のアトラクションに乗ろうと待っていると、その方達と再会したのだ。『와, 정말 인연이네요! (わっ, 本当に縁がありますね!)]。私たちはSNSを交換し別れた。この縁は今でも続いている。

故ピ・チョンドック詩人は朝子との三回目の最後の出会いを『아니 만났어야 좋았을 것이다. (会わない方が良かっただろう。)]と切り上げた。後方に行くほど二人の縁の結び目は緩んでいくのだが、その理由は「二人は異性の間柄だったからなのか?」と密かに推測してみる。三回目の出会いで朝子の姿を「枯れていく百合のようだ」と表現する部分が若干もの悲しい。私たちは幸いにも同性の友達だ。私たちの縁は枯れていく百合の花ではなく、美味しく熟していく果実酒のようになればと願う。

韓国旅行中、美味しいお店も行き、服も沢山買った。しかし、私の最高の思い出は、人々との「出会い」だったのである。風船飛行の出会いは、人に接することが苦手だった私に勇気や積極性を持たせてくれた。ロッテワールドで声をかけて下さった方達のように、私も日本で出会う外国人観光客の方々に自分から手を差し伸べたい。これこそが私が風船飛行で学んだ気持ちの良い縁の始まりであるということがわかっているから。

# 佳作

## 国境を越えた夏の出会い

吉村優月〔鳥取県立境高等学校〕

私は、旅行で2回韓国に行ったことがある。2回しか行ったことがないが、旅行に行くたびに韓国のことが好きになる。なぜなら、現地の人がとても親切にしてくれるからだ。現地では、買い物をしたり、伝統的な風景が見られる街に行って伝統菓子やお茶を飲むなど文化に触れたりした。母とカフェに行こうとしていたときのことだ。街を歩いてみて初めて気づいたのだが、ソウルの道は坂道が多く、お店にたどり着くまでがつかかった。旅行の日は夏で、猛暑日だったのですごく汗をかいた。カフェに着き、お店の人は私たちが日本人だと分かったと、積極的に日本語を使おうとしてくれた。それでも難しい時は簡単な英語を使ってくれたり、会話にジェスチャーを多めに入れてくれたりと、とても親切な対応をしてもらった。韓国人の温かさに触れることができた。

また、この旅行の中でも特に印象的だったことがある。それは、帰りの飛行機の中で起こった。飛行機は通路を挟んで3人ずつの席だった。私と母が奥から詰めて座っていると、若い女の人 came。私たちのほうを見て困っている顔をしていた。何だろうと思っていると、座る席を1つ間違えていると言われた。私たちが間違えてしまったのに、その人は申し訳なさそうにしていた。私たちが謝ると、「全然大丈夫ですよ。」と言ってくれた。日本人かなと思い話しかけたら韓国の方で驚いた。日本語を違和感なく話していたからだ。飛行機が出発し、母は寝て、私は本を読んでいた。すると、隣に座ったその韓国のお姉さんが話しかけてきた。日本語で話しかけられ、会話も全部日本語だったので不思議に思い、なぜ日本語が上手なのか聞いてみた。すると、日本にとっても興味があり、日本語を勉強しているそうだった。だから、この飛行機で日本に行き、日本人の友達に会い、日本を肌で感じて様々なことを学ぶのだと言っていた。普段ニュースやSNSなどで韓国には反日の人が多い、反日の教育がされているなどを見聞きしていたが、日本が好きで日本に旅行に行きたい、日本語を勉強したいと言ってくれる韓国の方に初めて出会って、驚くとともにとても嬉しかった。飛行機が日本に着いて空港で別れるまでの間、私の韓国旅行の話やお姉さんが日本に行って何をするのかなど、たくさん話した。そして、写真を撮ったりSNSを交換したりもした。飛行機に乗っている1時間半でこんなに仲良くなれるなんて、ましてや国籍も言語も文化も異なる人と時間を分かち合えたなんて、普段外国人と接する機会がほとんどない田舎に住んでいる私にとって、素直に出会いに感動した出来事だった。

私の中での韓国人のイメージを変えてくれた現地の方やお姉さんにはとても感謝している。私は、その出会いも含めて韓国がより好きになった。これからは私も韓国語を勉強し、私から積極的に韓国人をはじめとする外国の人々に話しかけ、友好を築いていきたいと思う。



# 佳作

## 8歳の韓日交流

中野浩道〔埼玉県〕

数年前、私は仕事で頻繁に韓国に行っていました。しかし、ゆっくりと韓国を観光したことがありませんでした。そこで、ある夏休みに、家族に韓国旅行を提案しました。しかし、うちの妻からは、パスポートはないし仕事も忙しいと断られ、小学3年生の娘と二人で行くことになりました。

私は初めての海外旅行となる娘に、日本のアメ玉を持たせました。なぜかという、もし、韓国で親切にしてもらった時に、韓国語の話せない娘は、お礼に日本から持ってきたアメ玉をプレゼントすれば、きっと韓国の人たちも喜んでくれると思ったからです。

初日のチヂミの店で、早速、アメ玉が役に立ちました。娘が下の階のトイレに一人で行ったとき、その店のおばさんがずっと心配そうに見ていてくれたのです。私に促されて、娘は恥ずかしそうに、おばさんにアメ玉を渡すと、おばさんはすごく喜んでくれて逆にもっとたくさんのアメ玉と、私の支払った代金からお小遣いとして娘に1000ウォンをくれました。

その晩のことです。娘とホテルで休んでいると、娘が急に紙と鉛筆をもって私のところにきました。韓国語で“ありがとう”を教えてほしいというのです。そこで、私は、カムサハムニダと教えてあげました。娘はひらがなで“かむさはむにだ”と書き、何度も練習をしていました。

次の日、わざわざ奥から冷たいジュースをもってきてくれた駄菓子屋のおばさんにも、焼肉を焼いてくれた店員さんにも、道を教えてくれたおまわりさんにも、娘はカムサハムニダと言ってアメ玉をプレゼントしました。みんな喜んでもらってくれました。帰国の飛行機の中でみると、日本から持ってきた、たくさんのアメ玉は全部無くなっていました。

私は、自分から韓国語を教えてほしいと言った娘に、すごく感動しました。10円位の飴玉ですけど、8歳の娘は自分の意志で、大きな韓日交流を果たしたと思います。それからの二人の珍道中は、さらに楽しいものであったことはみなさん想像できると思います。

あの日から5年が経ちました。娘は中学2年生になりました。今はコロナの影響で海外旅行は行けませんし、年頃の娘も父親と二人で旅行には行ってくれないでしょう。ある日、娘の同級生にBTSのファンの子がいて、私、韓国に行ったことあるんだと自慢していました。娘はあの時の記憶はないかもしれませんが、私にあの時の出来事を思い出させてくれました。旅行はいろいろな経験ができ、自分も他人も成長できる機会となり、思い出という宝物を残してくれます。早く、自由に海外旅行に行ける世界に戻ってほしいです。

# 佳作

## 韓国の記憶

工藤有紗〔女子学院高等学校〕

中学3年生の夏の事である。初めて韓国に行った。少しずつ韓国語を勉強してやっと検定に合格した私は、母と一緒に3泊4日の韓国旅行を計画し、念願の韓国に降りたったのであった。

旅行最終日の朝の事だ。その日私は1人で朝の広蔵市場へと向かった。大きな屋根の中に入ると、そこにいたのは沢山の人のせかせかと段ボールを運ぶお爺さんに、大きな鉄板でチヂミを焼いているお婆さんが良い匂いを漂わせていた。片手には生の魚がずらりと並び、もう片手には大量のキンパが積み上がっている、かと思えば小さなベンチに座りながらお婆さんがネギの皮を剥いている。そんな中をゆっくりと歩いていくと、お目当てのビビンバ屋台に辿り着いた。テーブルの上に並べられた銀色のボウルいっぱいに入れられたビビンバの具材に見惚れていると、「お姉ちゃん座りな！」とキッチンの奥から人の声が出て、そのままキッチンの奥まで自分の声が届く様「ビビンバ一つ下さい！」と言いながら座った。韓国に来てからの数日間で、声が大きくなった。忙しく変化する市場の中の様子を、隣のお店の中で煮える鍋から立ち上る湯気越しにぼーっと銀色のテーブルに頬杖をつきながら眺めていると、「はいお姉ちゃんのビビンバ、」と野菜がてんこ盛りで盛られた銀色の器を差し出され、あまりの大きさに驚きながら受け取った。すると間髪入れずに「はいこれキムチ、」「これはサービス、」と怒涛のおかず攻撃が始まったのだ。こんなにも貰って良いんですか…？」と言うと、「お姉ちゃん可愛いからもっとあげようか？」と返され、いつの間にか現れたもう1人の店員さんが「お姉ちゃんどこから来たの？」と続く。矢継ぎ早に飛んでくる質問にどうにか答えなければと必死になっていると隣のお客さんが「この子が一口も食べれてないじゃない！」と笑いながら話に加わり、更に輪が広がる。そうして時間が過ぎて行き、やっとビビンバを口にすると一気に口の中にごま油の香りが広がって「美味しい…」と思わず口に出たのだ。すると「美味しい？」と満面の笑みが添えられた韓国語が返ってきて、それに私はまた驚く。私は最初、日本語で「美味しい」と呟いたのだ。一瞬私の日本語が通じたのかと思ったが、慌てて私は「美味しいです！」と迫々しい韓国語で言い直した。料理を平げ席を立つと「また韓国においで」と3人分の声が聞こえる。「今度はお母さんも」と言うとお母さんに宜しく！お婆さんが二人出来たって！」と威勢の良い声が返ってきて、それに笑い声が続いた。来た道を辿りながら、私は市場に広がる空気を胸いっぱい吸い込んで「また来ます。」と日本語で呟いたのだ。

あれから2年が経つ。窓の外を見ては、毎日の様にあの湯気越しに見た景色、あの胸にしまった匂い、人の温度が蘇る。私があの日あの場所で記憶したものをまた感じる事が出来る日が一日でも早く来る様、今は祈るばかりだ。



# 最優秀賞

## “밥 먹었어요?”

勝又緋彩 [静岡理科大学 星陵高等学校]

“안녕하세요 ~ 우리 마야야 밥 먹었어요?”

한국어 학원에 다닐 때마다 선생님께서는 이렇게 나를 맞이해 주신다.

작년 봄에 거식증을 앓았던 나는 먹지 않는데도 불구하고 매번 “먹었어요” 라고 거짓말 대답을 했다.

항상 친절하신 선생님께 거짓말을 하는 자신이 싫었다.

선생님은 「식」 을 아끼는 사람이다.

“우리나라는 여름에 몸보신을 위해서 삼계탕을 먹는 거야”

“비가 오는 날에는 부침개가 먹고 싶게 되네 ~”

“선생님과 한국 여행을 가면 위가 10 개 있어도 모자라! 우리나라 음식은 최고인걸!” 즐겁게 식 이야기를 하시는 선생님과 식을 두려워하는 나. 선생님께 죄송한 마음과 자신에 혐오 때문에 선생님과 식 이야기하기 싫었다. 그래서 한국어 학원에 다니는 것도 우울했다.

눈이 내린 날 일이었다. 그날은 폐까지 열 것 같은 추위이었다.

“오늘은 진짜 춥네 ~ 이런 날은 따뜻한 거 먹고 싶지 않아? 칼국수를 먹자! 몸도 마음도 따뜻해지는 거야!”

너무나 쇠약하고 눈에 빛을 잃은 나를 걱정하셨던 선생님께서는 칼국수를 만들어 주셨다.

“됐어! 자 ~ 먹자!!” 책상 위에 늘어선 반찬들과 큰 그릇에 들어 있는 고기나 채소가 보였다.

(먹으면 살찌 버릴 것 같아... 근데 안 먹으면 무례해...) 먹고 싶은 마음은 없고 살찌는 게 무서운 마음만 있었다.

“잘 먹겠습니다” 간신히 입을 열었다.

칼국수를 한 입 먹자마자 여러 가지 맛이 입속에 속속 우러났다.

입속에 펼쳐지는 고기 육수. 코에서 맛보는 마늘. 혀 위에서 찌릿한 후추. 쌓인 눈을 녹여 버릴 만큼 따뜻한 국물.

국물과 잘 얹힌 면을 후루룩 삼키는 소리를 들으면서 얼어 버린 폐가 따뜻해지는 것을 느꼈다. 이렇게 맛있게 밥을 먹었던 날은 얼마 만일까. 잘 먹을 수 있었던 자신이 사랑스럽고 칼국수를 만들어 주셨던 선생님께 감사가 넘치고 울어 버렸다. “왜 울어? 아이고 울지마 우리 마야 ~”

그날부터 이제 1 년이 지났다. 지금은 식에 대한 두려움은 없어지고 식을 즐기고 있다.

“그때 왜 칼국수를 만들어 주셨어요?” “마야가 너무 걱정돼서. 곤란하고 있는 사람이 있으면 내버려 둘 수가

없거든” 선생님의 “정” 을 느꼈다. 항상 나를 걱정해주시고 상냥하신 선생님. 나도 언젠가 선생님처럼 “정” 을 가지는 사람이 될 수 있을까?

오늘도 신나는 발걸음으로 한국어 학원에 향한다. “안녕하세요 ~ 우리 마야야 밥 먹었어요?”

지금 나는 당당하게 대답할 수 있다. “네, 맛있게 많이 먹었어요!”

# 優秀賞

## “맛있었어요!”

福山春乃 [同志社高等学校]

외국어를 공부하는 사람에게 있어서 처음으로 그 나라에서 그 나라의 말로 의사소통을 한 순간은 특별한 기억으로 남는다. 내게 있어서 그 기억은 고소한 고기와 상추의 맛과 함께 남아 있다.

처음으로 한국에 갔을 때 나는 아직 소심하고 어린 중학생이었다. 한국말은 조금 공부했지만 한국말로 사람에게 말을 건 적은 한번도 없었다. 부모님과 남동생과 함께 서울에서 낫선 지하철을 타고 수원에 갔다. 관광을 해서 조금 피곤했던 우리 가족은 점심을 먹기 위해 고기집에 들어갔다. 거기서 인기 있는 식당이었던 것 같았다. 많은 사람이 바쁘게 왔다갔다하고 있었다. 자리에 앉아서 주문을 하니, 바로 고기와 국, 그리고 울긋불긋한 반찬이 많이 나왔다. 이렇게 많은 반찬이 나오는 한국식 고기집에 익숙하지 않았던 나는 마음 설레면서 젓가락을 쥐었다. 그 때 아버지가 요리리를 보시고는 나에게 말씀하셨다. “이것도 굽는 건가? 점원한테 물어봐” 그 말에 나는 갑자기 긴장을 했다.

서울에서는 일본말을 잘 하는 점원이 많기 때문에 내가 한국말을 할 필요가 없었다. 하지만 이 가게에는 일본말을 하는 사람은 없는 것 같고 가족은 아무도 한국말을 할 수 없었다.

아주머니가 또 새로운 반찬을 가져왔다. 심장이 두근두근 거린다. “이거 어떻게 먹어요?” 라고 할까? 아니면 “어떻게 먹습니까?” 라고 하는 것이 좋은가? 나는 용기를 내서 숨을 들이 마셨다. “이거 어떻게 먹는 거예요?” 내 목소리가 떨렸다. ‘내 말은 통했을까? 혹시 틀리진 않았을까?’ 불안해진 그 순간, 아주머니가 계를 손으로 잡고는 계 등딱지 속을 밥 위에 얹었다. “이건 이렇게 먹는 거야.”

성취감 때문에 갑자기 마음이 놓였다. 아주머니가 잘 구워진 고기 한 조각을 상추에 싸 주셨다. “이렇게 먹어봐.” 뜨겁고 즙이 많은 고기와 조금 차가우면서도 신선한 상추의 맛이 입 안에 가득 퍼졌다. 저절로 입가에 미소가 지어진 나를 보신 아주머니도 빙그레 웃으셨다. 긴장할 필요가 없었는데 왜 나는 그렇게 두려워한 걸까? 입 안에 퍼지는 고기의 맛과 함께 용기를 내길 잘 했다라는 안심감이 가슴 속에 퍼졌다.

고등학생이 된 나는 이제 그때의 내성적이던 아이가 아니다. 하지만 지금도 여전히 한국 요리점에서 고기를 먹을 때면 그 때가 기억이 난다. 고기와 상추의 행복한 맛과 긴장감과 기쁨. 그리고 친절하시던 아주머니. 다시 한국에 갈 때는 식당에서 주저 없이 이렇게 말하고 싶다.

“맛있었어요!”



## 優秀賞

# 감사의 마음을 전하는 미역국

中園楓 [長崎県立対馬高等学校]

‘음식으로 감사의 마음을 전할 수 있다면 좋겠다.’ 라는 생각을 한 적이 있습니까? 저는 요리하는 것을 좋아하기 때문에 그런 생각을 자주 합니다. 그런데 한국에는 그런 음식이 있습니다. 제가 가장 좋아하는 한국 음식, ‘미역국’ 입니다.

저는 중학생 때 BTS 라는 아이들을 통해 K-POP 뿐만 아니라 한국이라는 나라와 사랑에 빠졌고, 낙도유학제도를 통해 쓰시마 고등학교 국제문화교류과에 진학해서 한국어를 배우기로 했습니다. 입학을 기다리며 지내던 어느 날, 한국어 공부도 겸해서 한국 방송을 보려고 텔레비전을 켜습니다. 연예인들이 시골에 가서 직접 구한 재료로 음식을 만드는 방송이 나왔고, 몇 편을 보다 보니까 ‘나도 한 번 만들어 볼까?’ 라는 생각이 들었습니다. 그 때 처음으로 만든 음식이 바로 ‘미역국’ 이었습니다.

일본에도 ‘와카메 스프’ 라는 비슷한 음식이 있어서 가볍게 도전했는데, 만들어 보니 국물을 내는 방법도 재료도 처음 보는 것이 많아서 맛있을까 걱정이 되었습니다. 하지만 맛을 보니 깊고 부드러워서 입맛에 잘 맞았습니다. 다른 가족들 역시 제가 만든 미역국이 정말 맛있다고 해 주었습니다. 요리 방법이나 재료는 달라도 ‘맛있다’ 라는 감각은 일본인, 한국인 관계 없이 누구나 공유할 수 있는 감정이고, 이 감정을 한국 요리를 통해 가족들과 나눌 수 있었습니다. 그래서 미역국은 저에게 특별한 음식이 되었습니다.

이러한 ‘미역국’ 은 한국에서 생일에 먹는 요리로 유명합니다. 그런데 저는 미역국이 가진 더 큰 의미를 한국 문화 시간에 배웠습니다. 옛날에 아기를 낳은 어머니를 위해 영양가가 많고 쉽게 구할 수 있는 재료가 무엇이 있을까 고민한 끝에 만들어진 음식이 ‘미역국’ 이라는 것입니다. 즉, 미역국은 단순히 아이의 생일을 축하하기 위해 먹는 음식이 아니라 아이를 낳은 어머니께 감사의 마음을 전하기 위해 먹는 음식입니다. 쉽고 간편해 보여서 만들어 본 미역국인데, 이 음식으로 좋아하는 사람과 ‘맛있다’ 라는 감정을 공유할 수 있을 뿐만 아니라 감사의 마음을 전하는 방법이 될 수 있다니.

그래서 저는 이번 여름 방학에 집으로 돌아가면 사랑하는 가족, 특히 어머니께 미역국을 만들어 드리려고 합니다. 맛있는 시간을 함께 보내면서 어머니께 미역국이 가진 의미를 알려 드린 후에 저를 키워 주시고 믿고 응원해 주시는 것에 감사 인사와, 사랑한다는 말을 전하고 싶습니다.

## 佳作

## 내가 생각하는 한일 교류

戸部紗優花 [関東国際高等学校]

정치적으로 불편한 한국과 일본. 그렇다면 우리 관계를 개선할 수 있을까. 또한 한일교류의 기회를 늘릴 수 있을까. 이 문제에 맞서기 위해서는 유학생의 힘이 필요하다고 생각한다. 왜냐하면 유학은 국제교류에 있어서 큰 힘을 가지고 있기 때문이다. 나는 한국 유학을 생각하고 있다. 나는 원래 어릴 때부터 국제 관계에 흥미가 있고, 초등학교 3학년 때 한국 여행 갔을 때 한식의 맛과 한국 사람들의 다정함에 감동하고 좋아하게 되었다. 일부 일본인과 한국인은 서로 편견을 갖고 있고, 까닭 없이 싫어하는 사람을 가끔 본다. 그것은 현지인의 정을 모르기 때문이다. 나는 한국 사람들에게 많은 정을 느꼈다. 그래서 이번에는 내가 한국 사람들에게 많은 정을 느끼게 해주고 싶다. 고등학교에 입학하고 나서 한국의 고교생과 교류할 기회가 있었다. 그때 서로 일본어와 한국어를 섞어서 이야기했는데, 한국의 고등학생들은 너무나도 따뜻한 애들이었다. 이 교류를 통해 나는 한국 유학을 생각하게 되었다. 고등학교를 졸업하면 한국대학에 가서 현대문화와 시사에 대해 깊이 배우고 매일매일 일어나는 일을 현지에 직접 가서 느끼고 싶다. 그리고 많은 한국인들과 교류하여 한일관계의 문제점을 찾아 개선할 수 있도록 노력할 것이다.

그리고 대학을 졸업하면 나는 유학 코디네이터가 되고 싶다. 이유는 고교 1학년 때 한국유학에 대한 유학 사이트나 동영상 보고 있을 때 나 자신도 유학하고 싶은 사람에게 도움이 되고 싶다고 생각했기 때문이다. 대학에서 배운 지식을 모아 일본에 유학하고 싶은 한국인과, 한국에 유학하고 싶은 일본인을 돕고 싶다. 만약 도움을 준 일본이나 한국의 유학생들이 한일관계 개선의 가교 역할을 할 수 있다면 교류는 더욱 깊어질 것이다. 모국이 아닌 나라의 정을 많은 사람들이 알 수 있도록 하기 위해서는 우선 그 나라의 매력을 어필하는 것이 중요하다. 그러기 위해서 우리는 유학을 가는 것이다. 나는 유학생은 아주 강한 힘을 가지고 있다고 생각한다. 이렇게 조금씩 교류가 깊어지면서 뉴스 프로그램에서 한일간의 흐뭇한 화제가 방송될 날이 기다려진다.



# 佳作

## 내가 느낀 한국

村上未有 [愛媛県立新居浜南高校]

한국, 그건 가깝고도 먼 나라. 나는 지금까지 그렇게 생각했다.

텔레비전에 나오는 뉴스에는 반일 시위를 하고 있는 사람들의 모습이 비춰졌고, 어렸던 나는 슬픔과 두려움으로 가득 찼다. 그러던 나는 중학교 3학년 때, 한국 웹드라마에 빠지는 것을 계기로, 독학으로 한국어 공부를 시작했다. 하지만 독학만으로는 어려워서 어학 학습 앱에서 만난 한국인 여학생에게 배우기로 했다. 그렇지만 뉴스에서 본 한국의 이미지는 사라지지 않고 무서움 등이 있었다. 그래서 “단지 한국어만 배우는 관계” 라고 그 여학생에게 딱 잘라 말했다.

하지만 그 여학생은 항상 상냥했다. 연락할 때 답장이 늦어도 문화의 차이를 이해해 주며, “빨리빨리”의 한국 문화를 알려주고, 일본을 좋아한다고 말해줬다. 어느덧 전화나 편팔을 하거나 생일 선물을 주고 받기도 하고 우리는 친구가 되었다. 수첩과 만년필을 주고 받으며, 우리는 “졸업하면 서로의 나라에 가서, 두 나라에 대해 배운다”는 약속을 하고 수첩에 적었다.

그러던 중, 인터넷에서 어떤 영상을 보고 나는 강한 충격과 슬픔에 잠겼다. 그것은 일본에서 벌어지는 반한 시위의 모습이었다. 나는 일본을 좋아한다고 말해준 친구에게 미안한 마음이 가득했는데, 그 친구의 “그래도 좋아한다”는 말에, 고마운 마음으로 바뀌었다. 우리의 관계가 깊어질수록, 양국관계는 나빠지기만 하고 이렇게 가까운 나라인데도 멀게 느껴지는 것이 참 안타까웠다.

한국에 관심을 가지게 되고, 친구가 생겨서 지금까지 몰랐던 것을 더 많이 알게 되면서, 나도 모르는 가운데 내 생각 속에 편견이 있음을 깨달았다. 한국 사람들은 전부 일본을 싫어한다는 식의 뉴스 보도를 보면서 나 또한 어느 정도 거기에 동조하고, 골칫거리 의식을 가지고 있었던 것 같다. 과거사 문제는 지금도 남아 있어서, 무엇이 정답이고 무엇이 오답인지 솔직히 나는 모르겠다. 하지만, 그렇기 때문에 더 배우고, 상대를 알고 하는 것, 그것이 얼마나 중요한지 많은 사람들이 알았으면 한다.

아직 그 본적은 없지만, 한국이 나의 제 2의 고향이었으면 좋겠다. 그 만큼 한국은 나를 정말 많이 변화시켰다. 지금은 가기 힘들지만 언젠가 방문하게 된다면, 큰소리로 “나 왔어요, 고마워요.” 라고 말하고 싶다. 한국은 나에게 있어서 여러가지 의미로 가까운 나라가 되었다. 언젠가 나뿐만 아니라, 양국 사람들이 서로 “가까운 나라” 라고 말할 수 있는 관계가 되었으면 좋겠다.

## 佳作

# 내가 생각하는 한일교류

山岡美月季 [広島市立舟入高等学校]

작년 4 월 제가 간절히 바라던 학교인 우리 고등학교에 합격하여 가슴 설레었던 마음과 달리 이제까지 경험해 보지 못한 상황이 벌어졌었습니다. 코로나 바이러스의 영향으로 약 한달 반 동안 학교에 가지 못하고 집에서 공부를 해야만 했습니다. 학교에 갈 수 없기 때문에 친구들과 만날 수도 없는 외롭고 쓸쓸한 시간이었습니다. 그래서 생각난 게 <편지>였습니다. 엄마께서 이전에 <여러 나라의 사람들과 편지를 주고받았다> 라는 이야기를 해주셔서 흥미를 가지고 있었지만 기회를 찾지 못했었습니다. <지금은 시간도 충분히 있으니 한번 해 보자!> 라고 생각해서 펜팔을 시작하게 되었습니다. 중학생 때 한국에 가서 매우 즐거웠던 추억이 있었기 때문에 동갑인 한국 친구에게 편지를 써서 보냈습니다. 이것이 우리가 만나게 된 계기였습니다. 그녀와 친해지는데는 시간이 얼마 걸리지 않았고 서로 서투른 언어로 전화도 하고 편지를 쓰기도 하면서 많은 이야기를 나누었습니다. 우리 서로가 친해진지 몇 달 뒤 그 친구에게서 <미즈키와 친해지면서 일본에 더 흥미를 갖게 되어 일본 유학을 가고싶다> 라는 연락이 왔습니다. 제 친구는 요리를 너무 잘 해서 요리고등학교를 다녔었는데 저와 만나 일본 유학을 결심하게 되었고 유학 공부에 집중하기 위해 요리고등학교를 그만 두고 일반고등학교로 전학을 갔습니다. 저는 그런 그녀를 정말 존경하고 있습니다.

자기 희망을 실현하기 위하여 그렇게 큰 결심을 하고 결단을 내릴 수 있다는 것이 정말 대단하다고 생각하는 동시에 저와의 만남이 그 결심의 계기가 되었다는 것이 너무 기뻐했습니다. 저도 그녀와 만나게 되어 <일본어 교사가 되고 싶다> 란 장래 희망을 갖게 되었습니다. 그녀에게 일본어를 가르쳐 주면 <알기 쉬워! 고마워!> 라고 말해주는 것이 정말로 기뻐했습니다. 그 말을 들어 장래에 무슨 일을 할까? 하고 고민 하던 것이 단번에 사라진 한 순간이었습니다. 정치나 역사가 정말 우리 사이를 가로막을까요? 저는 자신을 갖고 아니요, 라고 말할 수 있습니다. 솔직히 두려움이 전혀 없었던 것은 아니지만 그때 용기를 내지 않았다면 지금의 제 꿈도, 그녀의 꿈도 없었을 겁니다. 혹시 망설이고 있는 사람이 있다면 한 걸음 더 용기를 내서 내딛는 것이 좋을 것 같습니다. 그리고 또 하나 제 꿈이 생겼습니다. 그 꿈은 그녀가 직접 만든 요리를 먹는 것입니다. 그날이 몹시도 기다려 집니다.



# 佳作

## 나만의 금메달

武谷和音〔兵庫県立長田高等学校〕

딱딱하고 퍼석퍼석한 부침개. 그것이 내가 인생에서 처음으로 만들었던, 그리고 처음으로 먹었던 한국요리다. 초등학교의 가정과실에서 선생님이 아슬아슬하면서 지켜봐주신 아래서 완성된 부침개는 잘되지 않는 않지만 너무 따뜻해서 맛있었다. 친구들한테 많이 칭찬도 받았고 도와주신 보호자분도 같이 좋아해줬으니까 나도 매우 기뻐다.

하지만 많은 말들 중에는 좋은 것들만 있는게 아니었다.

“재만 왜 재료가 다르냐?” “왜 특별 대우냐?” 라고 내게 좋지 않은 말을 하는 친구도 있었다.

그런 말들의 이유는 내 알레르기 때문이다. 나는 내가 어렸을 때 계란이나 견과류, 메밀 등의 알레르기를 가지고 있는 것이 알게되었다. 이후 친구들이 먹은 것을 못 먹게 속상하게 느낄 때가 저잖았는데 그 중 하나가 초등학교의 부침개 조리실습이었다. 친구들은 사민방을 짜서 역할분담 하고 만들어 갔는데 나는 알레르겐과 접촉할 수 없으니까 보호자분하고 둘이서 조리했다. 그런 대우가 어떤 친구에게는 부럽웠을지도 모른다. 물론 그 때는 나도 친구들도 어렸었기 때문에 남의 마음에 상처를 주기도 받기도 쉬웠던 걸 이재야 알 수 있지만, 당시의 내게는 그 말들이 마음을 뚫고 지나가는 것 같은 소리로 들렸다.

하지만 그 상처 받은 마음은 집에서 이야기를 들어줬던 조모 덕분에 풀렸다. 울컥하면서 심정을 토로하는 나를 보고 우리 할머니는

“오늘 네가 만들었던 것은 그냥 부침개 아니라 카즈네가 열심히 완성시킨 너만의 노력의 금메달이야.”

라는 말씀을 해주셨다.

“나만의 금메달”. 이 말들은 내 마음을 따뜻하게 만들어줬고, 좋지 않은 기억으로 남을 것 같았던 부침개는 나에게 특별하고 좋은 음식이 되었다.

그런 일이 있어서 나에게는 목표가 두 개 생겼다.

하나는 할머니에게 맛있는 부침개를 만들어주기다. 지금은 아직 계란을 만지지 못 해서 그럴 수는 없지만 언젠가 꼭 만들어줘서, 내가 할머니한테 받은 사랑 만큼의 사랑을 주고 싶다.

또 하나는 나처럼 알레르기 때문에 먹고 싶은 걸 못 먹은 어린 아이들을 위해 알레르겐 없이 맛있게 먹을 수 있는 음식들을 세상에 제안 해 가기다. 아무래도 일본에서도 한국에서도, 계란을 요리의 채색이나 마무리로서 쓰는 문화가 있다. 나는 그걸 존중하면서 알레르기 없는 사람도 알레르기 있는 사람도 함께 즐길 수 있는 음식문화를 구축해 갈 것이다.

## 最優秀賞

# 내 인생의 정말로 운수 좋은 날의 설렁탕

林真由 (岡山県)

“설렁탕을 사다 놓았는데 왜 먹지를 못하니, 왜 먹지를 못하니. 괴상하게도 오늘은 운수가 좋더니만…….” ‘운수 좋은 날’의 주인공 김침지가 울부짖는 마지막 대사이다. ‘설렁탕’은 마지막 장면의 슬픔을 극대화시키는데 한 몫한다. 이 소설의 영향인가? 그의 아내처럼 몸이 아프면 설렁탕이 생각난다는 사람들이 한국에는 많다고 한다.

나의 부모님은 일본에서 태어나고 자란 재일교포여서 자연스럽게 우리의 식탁에는 부침개나 비빔밥 등 한국 음식이 자주 올라왔다. 그중에서도 내가 제일 좋아하는 어머니의 요리는 국물이 보얀 설렁탕과 비슷한 요리였다. 소설 속에서도 현실 세계에서도 설렁탕에 자주 마음이 쓰인다. 단기유학으로 잠깐 서울에 갔을 때, 우연히 만난 음식도 설렁탕이었다. 운수 좋은 날의 배경이 경성(서울)인 이유가 설렁탕이 서울의 명물이기 때문인가 보다.

서울에서 내가 들어간 가게의 설렁탕 집은 걸절이와 깍두기, 부추김치 등, 그리고 파 한가득이 먼저 나왔다. 김치는 마치 서양 요리의 애플타이저와 같은 역할을 하는지 나의 식욕을 돋우었다. 드디어 설렁탕이 나왔는데 이 가게의 설렁탕 안에는 우리 어머니 요리와는 달리 소면이 들어 있었다. 김이 모락모락 나는 따끈한 설렁탕에 먹음직스러운 걸절이와 깍두기는 정말 잘 어울렸다. 한국의 짹짹한 겨울 날씨와 잘 어울리는 환상의 한 끼! 게다가 김치 이외의 다른 반찬이 필요 없는 간단한 상차림! 한국 분들도 그렇고 나로 하여금 설렁탕을 사랑할 수밖에 없게 만든다. 깔끔하고 담백한 설렁탕 육수 안에 푹 빠져있는 수육과 소면이 한국어에 빠져 있는 지금의 나의 모습과 닮았다.

설렁탕을 제대로 체험한 덕분인가? 한 손가락 두 손가락 따뜻한 기운이 목구멍을 스칠 때마다 운수 좋은 날의 장면이 다시 떠오른다. 주인공 김침지의 아내가 죽기 전에 먹고 싶어했던 설렁탕! 그가 아내를 위해 사 왔을 김이 모락모락 나는 설렁탕과 그것을 끝내 먹지 못했던 아내가 생각이 나 가슴이 저려온다.

이 가게를 나오며 다음에는 아버지와 어머니를 모시고 오고 싶다는 생각을 했다. 부모님은 한국어를 하지 못하시지만 나를 한국어를 배울 수 있게 학교까지 보내 주셨다. 패스트푸드나 자극적인 국물과는 다른 설렁탕의 깊은 맛은 오랜 시간 나를 정성으로 키워주신 부모님과 닮았다고 감사의 마음을 전하고 싶다.

추신 : 참, 내가 먹었던 설렁탕 사진을 어머니께 보여드렸는데 어머니가 만들어 주셨던 것은 설렁탕이 아닌 ‘꼬리곰탕’이었다.



## 優秀賞

# 내가 생각하는 한일교류

津村優希 [神田外語学院]

우리는 "좋아요" 부터 시작했다. 언어 교환 어플 속에 의기투합한 민은 이웃에 사는 한국인 유학생이었다. 처음 그녀와 전화했을 때 발음도 정확하며 유창한 그녀의 세련된 일본어를 듣고 그녀가 얼마나 일본을 좋아하는지 바로 알 수 있었다. 지금은 서로 동네를 오고가며 학교생활이나 고민거리를 나누는 가족 같은 친구이며 늘 만나는 반 친구처럼 편안함을 느낄 수도 있다. 대화를 통해 서로의 관심사가 양국의 역사에서 일치 한다는 걸 깨달은 우리는 서로의 견해가 궁금하다라는 생각을 통해 같이 공부하는 사이가 되었다. "유우키, 이거 보면 상처 받을 것 같은데 괜찮아?" 라고 물어보면서 보여줬던 일제 강점기 당시 일본과 한국에 대한 한국 측 해설 동영상과 문헌. 차라리 모르는 편이 더 나았다는 생각이 들 만큼 가슴아팠지만 양국에 대해서 이해하려고 힘내고 있구나라는 생각도 들어서 기쁘기도 했다.

그러나 우리에게도 순탄치 않은 날이 있었다. 그 날 우리는 도심에서 산책을 하다가 넓은 광장이 있는 신사를 찾았다. 울려 퍼지는 피리 소리와 함께 어르신들의 노랫소리가 들려왔다. "이게 무슨 노래야?" 물어온 민은 들려오는 평온한 곡조에 안도의 표정을 지었다. 마음이 편안해지는 음식에 절로 발걸음을 옮긴 곳에는 낯선 풍경이 펼쳐져 있었다. 악보를 중심으로 모인 6명의 어르신들 뒤에 흥백의 육일기가 있었고 그 중에는 일본군 군복을 입은 중년 남성도 있었다. 그 모습들이 눈에 들어온 순간 나도 모르는 감정에 나는 당황했다. 민은 이것도 자신이 좋아하는 나라의 문화 중 하나로 받아들인 걸까 아니면 자기 일제강점기 억압의 상징으로 생각한 걸까. 조용히 한 곳을 바라보는 그녀에게 '이 노래 정말 아름답지' 라며 건네는 것밖에 할 수 없었다.

아무리 시간이 지나가도 마음이 개운치가 않았다. 늘 어떤 이야기든지 솔직하게 터놓고 대화를 나누어 온 민에게도 말을 꺼내기 힘든 것이 있다는 것이 어렵게만 느껴졌다. 그러나 난 용기를 가지고 말을 걸었다. "오늘 노래를 들으면서 어떻게 느껴졌어?" 그저 한마디 "복잡했어" 라는 말이 나 혼자만의 감정이 아님을 설명해 주었다. 아무리 일본을 좋아해도 그녀도 국민성을 가지고 있는 것은 엄연한 사실이다. 당시 느꼈던 복잡함을 하나하나 풀어내 듯 말하는 그녀에게 어떤 말을 해야할까? "가까우면서도 멀다" 지금 나의 감정을 이보다 더 잘 설명할 수 있을까?

우리 화제는 서로의 할아버지께 들은 당시의 이야기가 되었고 어느새 우리는 할아버지와 의 소중한 추억 속에서 웃음꽃을 피우고 있었다. 그 분들이 서로 다른 생각을 가지면서 살고 있었더라도 우리에게겐 둘도 없는 존재다. 추억들을 이야기하다 보니 어느새 그리움이 북받쳤고 우리의 눈시울은 뜨거워졌다. 소중한 사람을 여기는 마음은 똑같았다. 민은 서둘러 내 눈물을 닦아주었다. 조용한 방 안에 내가 코를 훌쩍이는 소리가 유난히 크게 울려서 웃어 대던 순간 나는 행복한 시대에 살고 있음을 깨달았다.

과연 우리 할아버지가 우리와 같은 나이였을 때 민의 할아버지의 눈물을 닦아 드렸을까. "아는 것은 상대방에게 경의를 표하는 것" 이라고 할아버지께서 가르쳐 준 날부터 "한국인" 을 이해하기 위해 꼭 역사적인 배경을 알아야 한다는 생각에 많은 책을 읽어 왔다. 모르면 상대의 아픔을 알아줄 수 없는 것이 많다. 하지만 우리에게 가장 중요한 건 옛날이라는 단어 하나에 집중하기보다 현재와 미래에서 양국을 잇는 우리의 소중한 마음가짐과 행동 하나하나가 아닐까라고 생각한다.

양국의 팝 컬처의 다이어미즘은 우리가 서로 공유할 생각이나 기회를 한층 늘려간다. 오늘도 누군가가 손끝으로 양국의 가교에 한 걸음 내디뎠을지도 모르는 이 시대. 우리는 앞으로 어떤 시대를 볼 수 있을까. 보여줄 수 있을까.

## 優秀賞

# 한일교류의 꽃을 피우자

山極尊子 (埼玉県)

작년 일이다. SNS 에 일본인 바이올리니스트가 글을 올렸다.

“스튜디오 정리를 하다가 오래 전에 만든 멋진 곡을 발견했다. 이걸 편곡해서 지금 코로나로 고통 중인 사람들에게 선물로 바치고 싶다. 바이올린뿐 아니라 여러 악기가 함께하는 연주를 통해 큰 선물을 하고 싶는데 협조해 주지 않겠느냐” 는 내용이었다. 이러한 취지에 동감한 여러 연주가가 “참가하겠다” 고 이름을 올렸다.

한참의 시간을 거쳐 그 곡에 피아노 기타 등 여러 악기가 더해지고 또 멋진 가사와 노래가 곁들여져 흥겨운 곡이 완성됐다.

올해 들어 그 감동은 현해탄을 넘었다. 이 프로젝트에 감명받은 한국의 타악기 그룹이 그 곡을 새롭게 변형해 만들어 낸 것이다. 일본 연주자들은 그 한국 그룹이 편곡한 곡에 다시 자신들의 소리를 녹음했다. 그리고 마침내 한일 예술가들이 함께 만들어 낸 새로운 선물 곡이 완성된 것이다. 올 여름 이들 곡은 한국에서 유통되며 그 음반 수익금은 코로나로 고통받는 이들에게 기부될 예정이다.

한 일본 연주자의 제안으로 시작된 이 프로젝트가 왜 한국을 움직였을까?

그건 내가 잘 알고 있다. 왜냐면 나는 10 년 전부터 그 바이올린 연주자의 내한 공연 시 도움을 주고 있었기 때문이다.

그는 매년 내한공연 때 연주뿐 아니라 한국어와 한국문화를 배우려고 매우 노력하였다. 해가 지남에 따라 한국어도 잘할 수 있게 되어 연주하는 중간중간 곡 소개, 한국에 오게 된 사연과 감동을 관객들에게 스스로 말하게 됐다.

그 기개에 반한 기획사 사장님은 한일관계 악화에도 불구하고 좋은 음악을 제공하겠다는 신념으로 매년 변함없이 그를 한국에 초대하였다. 이윽고 팬들도 사인회 때 일본어로 바이올리니스트에게 말을 걸기 시작하였다. 이것이야말로 나는 진정한 한일교류의 진면목이라고 생각한다.

나는 이번 일로 깨달았다.

이번 콘테스트에 응모한 우리 자신이 한국에 대한 관심을 갖고 자신의 장소에서 일어난 취미든 육아든 최선을 다할 때 한일 교류로 이어질 수 있다는 것을.

이번에도 한국에 관심을 갖고 있는 한 바이올리니스트의 일성으로 많은 한일 예술인들이 모여 교류가 이루어졌다. 그리고 서로 할 수 있는 일을 지금 있는 자기 자리에서 최선을 다한 결과 곡이 나왔고 기부라는 사회공헌으로 이어졌다.

한일 교류는 떨어져 있어도 할 수 있다.

코로나 상황 속에서도 나는 일본에서 목표를 갖고 살아가고 싶다. 그리고 언젠가 그것이 큰 결실을 맺어 미래 한일 교류에 기여할 수 있다는 걸 믿어 마지않는다.



## 佳作

# 내 한글수행의 보물

高村聡 [奈良県]

지금부터 35 년전 나는 대학생이 되자 한국어를 배우기 시작하였다. 전공은 전자공학이었지만 취미로 라디오 강좌를 들으면서 시작하였던 것이었다. 당시는 왜 한국어를 배우냐고 자주 질문을 받곤하였다. 특별한 이유는 없고 이웃 나라니까 어떤 말을 하는지 궁금해서 한번 알아보도록 해보자 그런 단순한 동기이었다. 부담없이 시작한 것인데 한글이 음성학적 이론에 맞는 방법으로 이루어진다는 것을 알아 한국어의 매력에 잡혀버렸다.

한국어를 배우면 배울수록 한국어와 한국이란 나라에대한 호기심이 부풀어, 드라마나 영화뿐만 아니라 판소리나나 탈춤등 재미있게 감상해왔다. 그리고 몇번이나 현해탄을 왔다 갔다하고 한국여행 자주 다니곤하였다.

배우기 시작한지 얼마되지 않은 무렵 지금 다시 생각하면 부끄러운 일도 있었다. 광주의 식당에서, 비빔밥이나 냉면은 많이 먹었으니, 드문 요리를 먹어보려고 찾아서 벽에 써있는 “냉면개시” 라는 말이 눈에 띄었다. 그게 냉면과 다른 요리이름이라 착각해서 “냉면개시 주세요” 라고 주문 해버렸다.

또 어떤 제주도의 민박에서 주인의 어린 아들과 친해지고 같이 놀고있었으니, 그 소년이 특기가 물구나무 서기라 그랬는데, 나는 무슨 말인지 몰랐다. 그러면 그 소년이 물구나무라는 말도 모르면서 어떻게 대학생이 될 수 있었느냐고 깔깔 웃었다. 그것은 교과서에는 안 나오는 일상생활의 말도 중요하다고 재인식한 좋은 기억이다.

이렇게 재미있게 말의 학습을 계속하면 말이 통하게 되니까 배울 보람이 점점 늘어 갔다. 뭐니 뭐니해도 직접 한국말로 이야기하는 것이 그더없는 기쁨이되었다.

내리고 싶은 데를 미리 부탁해두면 정확하게 큰 소리로 알려준 친절한 버스기사님, 시장에서 많이 먹어라고 반찬을 더 주는 명랑한 아줌마, 독립기념관에서 만난 일본말을 학습하는 부지런한 학생들, 날씨가 좋은 날에 춤추고 노래하면서 야회하시는데 내가 걸어가는 것을 보면 돼지머리하고 배추김치를 먹고가라고 말을 걸어주신 술에 강한 아저씨등 등 친절하고 다정한 사람하고 이야기할 수 있었다. 이런 기억은 모두 지금도 보물로서 남아있는 것이다.

세월이 흘러, 요즘 오랫동안 한국에 못 가고있다. 현재는 양국의 정치 문제가 심각한 상태이고 게다가 신종코로나로 민간 교류도 자유롭게 할 수없게 되고 있다니 정말 외로운 일이다.

감염증문제가 사라져가면 이럴 때야 말로 한국에 나가서 직접만나 이야기해야만하는 것같아. 그래서 앞으로 보물을 찾아 가고 싶다.

# 佳作

## 안동의 김치

川村文 [東京都]

10 년 이상 전에 친구와 같이 안동으로 갔다. “안녕하세요” 정도밖에 한국어를 할 수 없었는데 처음 지방을 찾아가는 한국여행은 좋은 추억이 되었다.

우리는 안동에 사는 일본어 가이드 아저씨에게 안내를 부탁하기로 했고, “안동국제탈춤페스티벌” 을 보고 유네스코 세계문화유산 “하회마을” 도 구경했다. 천고마비의 가을이어서 눈에는 누런 벼 이삭이 햇빛에 반짝반짝 빛나고 있었다.

그날 밤은 가이드 아저씨의 집에 머물렀다. 그 집은 교외에 있는 단독주택인데, 주변에는 청청한 밤이 펼쳐지며 풀냄새가 나고, 이웃집 외양간에는 암소가 건초를 뜯어 먹고 있었다. 가이드 아저씨는 일본어를 유창하게 할 수 있었는데 아내 분은 전혀 못했다. 그렇지만 두 분이 아주 친절하게 대접해 주었기 때문에 마치 시골의 친척 집에 온 것 같은 편안한 분위기였다. 우리는 시집 간 따님이 쓰셨던 온돌 방에서 푹 잤다.

다음 아침에 아내 분이 식사를 마련해 주셨다. 갓 지은 따끈따끈한 밥, 안동 명물요리인 고등어구이, 계란말이, 나물, 그리고 배추김치. 호텔 아침이 아닌 일반 가정의 따뜻한 아침이었다. 그런데 실은 나는 매운 음식을 잘 못 먹었다. 눈 앞에 있는 김치를 보고만 있었더니 아저씨가 눈치있게 말했다.

“김치 많이 드세요! 진짜 맛있어요, 우리 와이프가 직접 담근 건데... 자, 한번 좀 드셔야죠”

어쨌쨌... 머뭇머뭇 김치를 집어서 먹어 보았다. 음... 음? 맛있다!

맵긴 맵지만, 조금 칼칼하면서도 새콤하기도 하고 숙성된 감칠맛이 스며든 배추김치였다. 지금까지 먹어 본 적이 없는 이른바 “손맛” 이라고 하면 좋을까? 나는 자기도 모르게 더 한 입 먹었다.

“네, 맛있어요. 뒷맛이 상큼한 것 같아요.”

“배추도 우리 밭에서 재배한 거예요. 물론 유기농으로 하거든요.”

“정말 맛있어요. 사모님은 요리 솜씨가 아주 좋으시네요.”

아저씨는 입이 귀밑까지 찢어지면서

“그럼요, 우리 와이프가 맛있는 음식을 만들어 줘야 내가 이렇게 가이드를 할 수 있어요. 덕분에 손님들도 너무 기뻐하세요.”

옆에서 아내 분은 잠자코 방글방글 웃으면서 우리를 바라보고 있었다.

한국 사람에게 있어서는 솔푸드인 김치. 김치는 지방에 따라 집에 따라 재료도 양념도 다르다고 하는데, 그때 내 입맛을 사로잡은 안동의 김치와 똑같은 것을 딱 한 번도 만난 적이 없다. 일기일회의 김치였을 지도 모른다.

지금도 한국 탈을 보면 아내 분의 웃는 얼굴과 와이프를 자랑한 가이드 아저씨의 목소리가 생각나서 또 안동의 김치가 땡긴다.



## 佳作

# 여수에서 만나 반해버린 갯장어 요리

佐藤康予 [東京都]

일본에서 갯장어(하모)라고 하면 교토(京都)의 풍물로서 널리 알려져 있고 기온(祇園) 축제에서도 빼놓을 수 없는 음식이다. 주로 서일본에서 잡히는 갯장어는 내가 살고 있는 도쿄(東京)에서는 일본 요릿집에 가지 않는 한 거의 먹을 기회가 없다고 해도 과언이 아니다. 그런 갯장어를 2012년 여름, 여수(麗水)에서 열렸던 세계박람회(엑스포)에서 먹어 보았는데 얼마나 맛이 있었는지 생각만 해도 군침이 돈다.

나는 그때까지 여수 지역의 명물이 갯장어라는 것을 전혀 몰랐었다. 그때는 아직 한국말이 서툴러서 서울은 말할 것도 없고 여수까지 혼자 가기에는 불안했기 때문에 추가 요금을 내더라도 혼자서 패키지여행을 가기로 했다. 박람회 회장에서 자유로운 시간이었다. 전시관의 견학도 하는 등 마는 등 하며 한식 식당 이외에는 거들떠보지 않고 여기저기 향토 음식을 찾아다녔다. 그러다가 아늑하게 꾸민 장어요리 전문점을 찾아냈다. 2인분부터 주문이 가능한 곳이었는데 나는 혼자였지만 망설임 없이 갯장어 샤부샤부를 주문해 보았다.

끓는 냄비 안 육수에는 고명으로 대추, 인삼, 양파, 그리고 피망이 떠다니고 있었다. 촘촘하게 칼집을 낸 갯장어 한 점을 펼 펼 끓는 육수에 살짝 데쳤더니 열은 분홍빛을 띤 뽀얀 살이 오그라들면서 하얀 모란꽃처럼 변했다. 그것을 바로 냄비에서 꺼내 양념장에 찍어서 먹어 보았다. 여분의 기름기가 육수에 빠져나가 아들아들해진 살과 쫄깃한 껍질과의 식감 차이가 씹으면 씹을수록 느껴졌다.

다음에는 나의 취향대로 육수에 부추, 팽이버섯, 양파를 함께 데친 후 짬을 써서 먹어 보았다. 갯장어만 따로 먹을 때와 다른 차원의 맛이 느껴졌다. 입 안에서 복잡하게 얽히는 맛이 식욕을 돋우어 자꾸 손이 갔다. 너무 배가 불러 마지막 소면 사리까지 먹을 수 없다는 것이 무척 안타까웠지만 산해진미를 실컷 즐겼다.

올해도 어김없이 무더운 여름이 찾아왔다. 여름 보양식 재료를 사기 위해 백화점에 갔는데 생선 매장에서 손질해서 해동시킨 갯장어를 팔고 있는 것을 우연히 발견했다. 9년 만의 운명적인 만남에 얼마나 감회가 새로웠는지 저절로 갯장어에 손이 갔다. 집에서 여수의 추억을 더듬으면서 샤부샤부로 먹어 보았는데 역시 한국에서 먹어야 제맛이라는 것을 새삼스럽게 느낀 무더운 여름밤이었다.

살짝 데치면 꽃이 피듯 하얗게 오그라들며 절묘한 식감으로 먹는 재미가 쏠쏠한 갯장어. 시대를 막론하고 더위를 이기는 보양식으로 꾸준히 사랑받아 온 이유를 이번 경험을 통해 다시 한번 알 수 있었다.

# 佳作

## 내가 느낀 한국

森林奈穂美 [新潟県]

저희 집 밭에는 몇 년 전부터 ‘한류 코너’ 라는 밭이 있습니다. 그 밭에서 애호박, 깻잎, 상추, 고추 등을 재배하고 있습니다. 그리고 지금 수확 시기를 맞이하고 있습니다. 제가 한국어를 배우기 시작할 때 ‘한류 코너’ 를 만들었습니다. 그때의 이야기입니다.

어느 날 한국어 수업 때 한국어 선생님께서 애호박을 구입하려고 슈퍼에 가서 애호박을 찾았는데 매장 구석에 한 개만 있어서 한국에서 애호박은 자주 먹는 야채인데 이것밖에 없어서 낙담했다고 말씀하셨습니다. 저는 애호박이 어떤 모양을 하는 야채인지 잘 몰랐습니다. 애호박이 궁금해서 수업이 끝나고 집에 돌아와서 애호박을 인터넷으로 검색해 보니까 오이와 비슷한 사진이 나왔습니다.

“아~! 한국 드라마에서 비슷한 야채로 요리를 하는 장면을 본 적이 있었다!”

저는 이것이 애호박이라는 야채라는 것을 알았습니다. 물론 지금까지 사본 적도 없고 슈퍼에서 파는 것조차 몰랐습니다. 재배방법도 알아보니까 저희 집 밭에서 재배가 가능할 것 같았습니다.

즉시 저는 아버지께 상의했습니다. 아버지께서도 애호박이란 야채는 처음이라 씨를 뿌리는 것보다 모종을 사서 심는 식으로 하자고 하셨습니다. 모종은 홈센터에서는 팔지 않아서 인터넷으로 구입했습니다. 며칠 후 노란색 꽃의 모종이 왔습니다. 그 모종을 바로 밭에 심었습니다. 물을 주고 거름도 줘서 애호박이 잘 열리도록 기도하면서 길렀습니다. 그러는 동안 줄기 밑에서 귀여운 애호박이 열렸습니다. 애호박 끝의 꽃이 시들면 수확하기 딱 좋습니다. 제가 생각한 것보다 애호박이 많이 열렸습니다. 게다가 너무 빨리 자라서 수확하지 않으면 엄청 커집니다. 특히 비가 내린 다음날에는 성장이 빨라서 많이 수확할 수 있습니다. 수확을 많이 하면 친구들과 아는 사람들에게도 나눠줍니다. 일본에서는 낫선 야채라서 싫어할까 걱정했지만 의외로 다들 신기하다고 기뻐했습니다. 선생님께도 많이 드렸습니다.

처음에 저희 아버지는 저희 집 밭에 외국 야채를 심는 것을 좋아하지 않았지만 주위에 평판이 좋아서 지금은 외국 야채들을 환영하고 있습니다. 그래서 지금은 애호박뿐만 아니라 깻잎, 상추, 고추도 심었습니다. 상추와 깻잎은 한국 드라마 흥내를 내서 반찬과 고기를 싸서 입을 크게 벌리고 먹으면 너무 맛있습니다. 자주 먹는 일본 야채와 한국 야채의 차이는 흥미롭습니다. 코로나 시대에 해외여행은 커녕 국내여행도 어렵습니다. 하지만 오늘도 저희 집 밭의 국제화는 진행 중입니다.



# 最優秀賞

## 도한놀이

小川真未 [千葉県]

“도한놀이” 라는 말을 들어봤나요?

일본에 있으면서 한국여행을 즐기는 것을 도한놀이라고 한다.

한국여행을 가기 어려운 요즘 상황에서 태어난 일본의 유행어다.

한국여행을 많이 해봤던 나는 이 유행에 따라가지 않을 수 없었다.

지금부터는 일본에 있으면서 쓰는 나의 한국 여행 일기다.

나는 이 글을 일본어로 쓰지 한국어로 쓰지 생각했다가 결국 한국어로 쓰기로 했다. 왜냐면 한국에 있는 일본여행을 그리워하고 있는 사람들도 한국에서 일본을 느낄 수 있는 일본 여행 놀이를 즐겨 주기를 바라기 때문이다.

도한놀이란 호텔에서 한국 여행 가서 즐기는 야식으로 먹는 치킨이나 한국에서 파는 캔 음료수 등 한국의 먹을 것을 준비하고 귀여운 잠옷으로 갈아입고 예쁘게 플레이팅된 한국 음식들과 함께 인증샷을 찍은 다음에 그것을 맛있게 먹는 것이라고 한다.

하지만 이 시극에는 외출하기 어려워서 보통 호텔에서 한다는 도한놀이는 할 수가 없었다.

얼마 전 한국의 친구가 나에게 “지금은 한국요리 먹고 싶어도 먹기 힘들지?” 라고 물어봤는데 사실 그렇게 어렵지는 않은 것 같다.

외출하기 힘든 상황 덕분에 집에서 요리를 할 기회도 많아졌기 때문이다.

그래서 나는 내 방식으로 집콕하면서도 즐길 수 있는 방법을 생각해봤다.

요즘 시골에 있는 마트에도 한국라면, 고추장, 쌈장 같은 식품도 많이 보인다.

지금까지는 몰랐던 내 곁에 있던 한국이 보였다.

언젠가 또 한국에 갈 수 있는 날이 오면 뭘 먹고 싶을까 생각해본다.

역시 바삭바삭한 치킨이 제일 먼저 생각났다.

거기에 술에 약한 나는 무알콜 맥주를 시원하게 한잔. 내 나름의 치맥이다.

치킨을 직접 만들어보고 사진도 찍고 SNS 에 올렸다.

먹고 싶은 한국 음식이 생각날 때마다 마음만은 언제든지 한국에 갈 수 있다.

이게 바로 내가 생각했던 집콕 도한놀이였다. 생각보다 재미있었다.

김밥이랑 잡채를 더 예쁘게 만들 수 있도록 다음번에는 다양한 색깔의 재료들을 준비해야겠다.

앞으로 반찬도 많이 해보고 싶고 올해는 집에서 김장도 꼭 해보고 싶다.

집콕 도한놀이를 해봤지만 역시나 “한국에 가고 싶다” .

도한놀이는 나의 한국여행에 대한 기대감을 더 크게 만들고 있다.

여기저기 다니고 싶은 곳, 먹고 싶은 음식도 끝없이 생각나서 상상만 해도 배가 부른 느낌이다.

그러나 지금은 조금만 더 집에서 도한놀이를 즐기면서 가끔 치맥, K POP, 한국 드라마를 즐기면서 다음에 쓰게 될 멋진 나만의 한국 여행기를 만들기 위해 여행 계획을 생각할 시간으로 하려고 한다.

## 優秀賞

나의 할아버지와 오버랩되는  
골목 모퉁이의 오락실 할아버지

川崎良優 [帝塚山学院大学]

나의 증조할아버지는 먼 옛날 한국에서 일본으로 이주해 온 재일 교포이다. 우리 세대는 이 분들의 애환을 잘 모른다.

하지만 재일 교포 작가들을 통한 간접 경험으로 조금은 상상해 보고는 했다. 재일 교포에 대해 김학영 작가는 ‘어느 쪽에도 속하지 못하는 원죄’로, 유미리 작가와 가네시로 작가는 ‘어디에도 속하지 않는 것을 특권’이라고 표현했다.

간접 경험도 중요하지만 직접 경험은 더 중요할 수 있다. “관광객들이 별로 안 가는 곳에 가서 보통 사람들을 만나 보자!” 나는 기억에 거의 없는 할아버지의 흔적을 찾아 문득 한국을 방문하기로 했다. 멋진 곳, 좋은 사람들이 참 많았지만 작은 골목길 모퉁이에 있던 오락실과 그곳에서 만난 할아버지가 가장 기억에 남는다. 용기 내어 “안녕하세요?” 인사를 하며 옆에 앉자 할아버지는 “어느 나라 분이세요?” 하고 물으셨다. 일본 사람이라고 대답하자 반가운 표정으로 여러 질문을 해오셨다. 그러고는 같이 게임을 하자고 제안해 오셨다. 일본에서는 별로 없는 일이라 신기했지만 웬지 안심이 됐다. 원래는 30분 코스였는데 하다 보니 1시간이 훌쩍 지나가 버렸다. 게임이 끝난 후 게임비의 반을 내려고 하자 할아버지는 게임비를 받지 않으셨고 대신 공부 열심히 하라고 하셨다.

위에서도 말했듯이 나는 나의 할아버지와 추억이 없다. 하지만 오락실 할아버지와 만남을 통해서 ‘우리 할아버지도 이렇게 인자하고 따뜻한 분이셨겠지?’ 하고 생각에 잠겼다.

아주 오래전 할아버지께서는 어머니께 “손자가 클 때 즈음에는 지금보다 한일관계가 더욱 좋아지고 사람들의 왕래가 많아져 가까워지면 좋겠다.”고 말씀하셨다고 한다. 다행히 할아버지의 바람대로 되어가고 있고 할아버지가 일본을 건너오셨을 때와는 비교도 안 될 만큼 한국은 경제 대국이 되었다. 하지만 오락실 할아버지와 같은 인간 냄새나는 분은 예전에도 계셨고 지금도 존재한다. 나의 좋았던 한국 여행의 추억담을 할아버지께 들려드리고 싶다. 한국과 일본 양쪽을 다 주고 가신 할아버지께 감사의 말씀도 같이 올리고 싶다.

한국을 직접 경험한 나는 앞에서 언급한 세 명의 작가와 생각이 달라졌다. 노력에 따라서는 ‘양쪽에 다 속할 수 있는 것이 재일 교포의 특권’이 아닐까? 그러기 위해서는 두 나라의 언어와 문화를 이해하고 능통하는 것이 중요하다. 이것을 나의 이점으로 만들기 위해 두 나라를 알기 위해 끊임없이 노력해 나갈 것이다. 지금 이 순간도 그 노력의 일부 분이다.



## 優秀賞

# 떡배기 설렁탕을 닮은 아저씨

山尾玲未 [大阪府]

‘설렁설렁 만들어서 설렁탕인가(웃음)?’ 하고 생각했는데 국물이 보양고 맛이 농후해서 ‘설농탕’ (雪濃湯)이라고도 한다. ‘설렁탕’은 한국의 대표 음식이라고 할 만큼 대중적인 사랑을 받고 있는 보양식이라고 해서 꼭 한 번 먹어보고 싶었다.

한국에 도착한 후 호텔 밖을 바라보니 설렁탕이라고 쓰여 있는 커다란 에어컨판이 눈에 들어왔다. “그래! 한국에서의 첫 식사는 거기에서 하자!” 가게에 들어가자마자 “소독하세요!” 라는 사장님의 거센 말투가 울려 퍼졌다. ‘코로나 때문에 사장님이 좀 민감한가 보다.’ 하고 이해하면서도 마음 한쪽에서는 ‘우리가 일본인이라 싫어서 그런가?’ 하는 생각이 들었다. 마음을 조마거리며 그 가게의 대표 메뉴인 설렁탕을 시켰다. 첫 설렁탕을 한 입 떠먹었는데 맛이 멍멍하고 아무런 맛도 느낄 수 없었다. 적당히 소금을 치고 테이블 위 용기에 담긴 수수께끼 느낌이 나는 양념장을 넣었다. ‘나쁘지 않은 걸. 성공했어!’

몇 번 다니다 보니 설렁탕집 사장님이 우리를 기억하고는 “한국에 뭐하러 왔어요?” 하고 물어오셨다. 이것을 계기로 아저씨와 친해질 수 있었다. 일본에서는 아무리 단골이라 하더라도 개인적인 질문을 하는 일은 거의 없다. 하지만 한국에서는 늘 일상인 것처럼 자연스럽다. 이 자연스러움은 설렁탕 옆에 놓인 김치처럼 어울린다.

마지막 날 나는 평소대로 설렁탕을 먹었고 거의 다 먹었을 무렵 옆 자리에 앉아 있던 손님이 수수께끼의 양념장을 만두에 쳐서 먹는 것을 보았다. ‘아뵘싸! 그 수수께끼의 양념장의 정체는 설렁탕에 넣는 것이 아니라 만두를 찍어 먹는 것이었구나.’ 나는 설렁탕의 본연의 맛을 모른 채 귀국했고 지금도 알지 못한다.

그 맛은 모르지만 오랜 시간과 정성을 들여 꼭 고아야 제 맛이 나는 설렁탕이 한국 사람들과 닮았다는 것은 안다. 설렁탕집 사장님이 그랬듯이 한국 사람들은 처음에는 무뚝뚝해 보여도 시간을 들여 몇 번 만나면 떡배기 설렁탕처럼 온기를 품고 있다는 것을 알게 된다.

사람들은 흔히 첫인상이 중요하다고 하지만 뭔가를 알려면 설렁탕을 만드는 것처럼 시간과 정성을 들여야 한다는 것을 이번의 경험을 통해 배웠다. 또 시야가 좁고 사람을 별로 믿지 않았던 나는 식당 아줌마가 추천해 준 음식을 먹지 않았다. 생각해 보면 후회 투성이이다. 그래서 앞으로 후회가 남지 않도록 늘 도전하고 최선을 다하려고 한다. 이번 여행은 나에게 많은 것을 가르쳐 준 인생의 나침반과 같은 존재이다.

# 佳作

## 모란시장에서

近藤京子 [新潟県]

서울에서 지하철로 한 시간쯤 지나면 모란시장이 있어요.

이 시장은 4와 9가 붙는 날에 장이 열린답니다.

늘어진 텐트에는 식료품은 물론이고 양복이나 한복, 신발, 잡화, 침구 등등 여러가지 팝니다. 천막식당을 들여다보니 아직 오전 중인데 벌써 소주를 마시는 아저씨들이 있었어요. 마치나 축제분위기와 같았어요.

고추가게에 들어갔는데 가지각색의 고추가 산더미처럼 쌓여 있어서 놀랐어요. 큰 것은 제 손바닥 정도가 되어 먹음직 했어요. 고추라고 하면 한국을 대표하는 재료잖아요. 이왕 한국에 온 김에 좀 맛을 봐야지. 그래서 두서너 개 있으면 됐어요.

저는 집게손가락하고 가운데손가락을 세워 두 개 달라고 했어요.

아줌마는 곧 어린이용 바게트 에다가 고추를 넣기 시작했지 뭐예요.

어머! 저는 맛을 좀 보고 싶은 거뿐인데 즉각 고추를 두 개 잡고 얼마냐고 하니 아줌마는 아이고! 가져 가라고 손짓을 했거든요.

감사합니다! 인사를 드리고 그 고추 두 개를 가방 안에 넣으려고 하니 아줌마가 잠깐만 있으라고 하지 않았어요. 그리고 옆 가게에서 제멋대로 봉투를 가져와 여기에 넣고 가라고 저한테 넘겼어요. 아줌마 정말 고맙습니다!

좀 가다가 젓갈가게가 있었어요.

오징어, 낙지, 새우젓, 정어리, 새우, 굴 등 해산물이나 본적이 없는 야채젓갈도 있었어요. 신선하고 게다가 엄청 싸서 다 사고 싶어 졌어요. 수북이 쌓인 젓갈들. 보기만 해도 군침이 돌았어요.

우선 판매단위를 확인했어요. 다시 고추가게에서 있었던 일이 되풀이 될까 봐.

보니까 여기에서는 한 합 말로 재고 있었어요. 그래서 저는 손가락으로 오징어를 가리켜 두 그릇 달라고 하니 아저씨는 제가 주문한 오징어젓갈을 비닐봉투 안에 넣잖아요. 성공!

근데 제가 얼마냐고 하니 제 말투가 한국사람답지 않아서 그랬는지 일본사람이냐고 했거든요. 네 그렇다고 하니 아저씨는 갑자기 저한테 넘긴 오징어젓갈을 빼버렸어요. 깜짝 놀란 저는 아마 아저씨의 아버지께서 일본인한테서 학대를 당해서 일본인들을 미워서 그런지.

아니면 아버지의 유언에서 일본사람하고는 절대로 사이 좋게 지내지 마라고 써 있어서 그런지.

한국사람들은 부모의 말씀은 절대적이니까요. 이리 속으로 생각했어요.

이것 저것 나쁜 생각만 들어 그냥 슬퍼져서 고개를 떨구고 말았어요.

그런데 저는 쓸데없는 생각을 한 것 같았어요.

아저씨는 이런 먼 장소까지 잘 왔다고 서비스! 서비스! 해서 오징어젓갈을 더 잔뜩 넣어주셨어요. 얼마나 기뻐는지 저는 그만 눈물이 나서 얼굴을 못 들었어요.

한국에 갈 때마다 인정이 넘치는 이런 사람들과의 만남이 있어요.



## 佳作

# 내 시야를 넓혀준 한국문화연수여행

今井結佳子 [東京外国語大学]

내가 인생에서 처음으로 간 외국이 한국이었다. 계기는 내가 다녔던 중학교에서 한국문화연수여행이 실시되었고 그것에 참가한 것이었다. 그때는 한국에 대한 정보는 미디어를 통해서만 얻고 있었기 때문에 한국과 일본 사이에 있는 정치적인 문제나 역사적인 문제에 대해서만 보고 있어서 한국과 일본이 사이 좋게 되는 것은 아주 어려운 일이라고 생각하고 있었다. 이렇게 소극적인 생각을 가지고 있었는데 실제로 한국에 가 보니 그런 생각은 사라졌다.

그 여행에서는 여러 군데 관광지를 방문하거나, 서울에 있는 고등학교에서 학생들과 교류하거나 했다. 이 여행을 통해서 내가 느낀 것은 일본과 공통된 문화, 복잡한 역사와 그 상흔, 그리고 한국 사람들의 인정이 넘치는 모습이었다. 이 여행에서 무령왕릉, 백제문화단지, 정림사 등을 둘러봤다. 그곳에서 본 유적은 일본에 있는 유적과 매우 비슷해서 솔직히 처음에는 한국에 왔다는 실감이 나지 않았다. 하지만 그런 생각과 동시에 일본과 한국이 옛날부터 서로 관계가 있고, 영향을 미쳐왔다는 것을 느꼈다.

천안에 있는 독립기념관에도 갔다. 거기서는 일제가 한반도의 사람들에 대해 행한 참혹한 역사를 목격했다. 그때 본 일본의 잔학한 역사는 솔직히 말하면 외면하고 싶을 정도였다. 하지만 이러한 역사를 제대로 배우고 받아들여 그것을 후세에 남기는 것이 필요하다고 생각했다. 그래야 한국과 일본은 앞으로 더 좋은 관계를 구축할 수 있지 않을까라고 생각했다.

그리고 오두산 통일전망대에 가서 남북한 국경을 망원경으로 봤다. 한국과는 다른 북한의 모습이 인상적이었다. 통일전망대를 방문하고 한반도에 남은 전쟁의 상흔을 실감했다. 같은 민족이고, 같은 언어를 쓰는데도 불구하고 분단된 국가인 남북한. 현대사회에 남아 있고 해결해야 할 중요한 문제라고 느꼈다.

그리고 여행 중의 한국 사람들과의 만남이 특히 인상적이고 기억에 남아 있다. 많이 서비스해 주고 환영해준 식당의 짝짝한 사장님. 「어디서 왔니?」라고 물으셨고 우리가 「일본에서 왔습니다!」라고 했더니 「잘 왔네! 즐겨!!」라고 말해주셨던 처음 만난 할머니. 그 여행에서 한국인의 인정을 많이 느꼈다. 교류회에서 만난 학생들은 일본 문화나 일본어에 대해 많은 관심을 가지고 있어서 너무 기뻐다.

그 한국문화연수여행은 내 시야를 넓혀주었고 직접 체험하는 것의 소중함을 가르쳐주었다. 미디어를 통해서만 알 수 없는 한국을 알게 된 이 여행은 평생 잊지 못할 뜻깊은 여행이 되었다.

## 佳作

누르지 않아도 다가와 주는  
'도우미 폰' 이 있는 나라

若松友奈 [兵庫縣]

한국의 지하철 개찰구 한쪽 끝에는 '도우미 폰' 이 설치되어 있어 뭔가 곤란한 상황이 생기면 직원을 호출하여 도움을 받을 수 있다. 아주 좋은 시스템인데 한국말이 잘 통하지 않는 외국인들에게는 넘지 못하는 높은 허들 같은 존재이다. 하지만 말이 잘 통하지 않아도 굳이 도우미 폰을 누르지 않아도 그 높은 허들을 넘을 수 있는 곳이 바로 한국이다. 한국 여행을 망설이는 여러분께 나의 여행기를 전하고 싶다.

어느 여름날 숙박할 예정이었던 게스트하우스로 가기 위해 지하철을 타려다가 역에서 헤매고 말았다. 도우미 폰을 눌러보았지만 우리의 한국어가 역무원에게 잘 전달되지 않았다. 그 광경을 본 한 남성이 말을 걸어왔는데 일본어를 할 줄 아는 분은 아니었다. 그분은 모든 것을 해결해 주었고 우리에게 어디에서 왔는지, 어디로 가는지 등 여러 질문을 해 왔다. 다른 여성도 다가와 괜찮냐고 걱정해 주셨다. 우리가 묻기도 전에 먼저 말을 걸어 주신 것에 매우 감동했다. "참 좋은 사람들을 만났다..." 이렇게 여운에 잠겨 걷고 있는데 아까 그 남자가 우리 쪽을 향해 걸어오고 있는 것이 보였다. 그분은 멀리서 우리가 잘 가고 있나 지켜보다가 또 헤매는 우리를 보고 걱정이 되어 쫓아온 것이었다. 그제야 알았다. 왜 우리에게 이런저런 질문을 했는지를. 일본에도 친절하 사람 많지만 먼저 다가와 손을 내밀어 주는 사람은 드물다. 그리고 이것저것 질문도 하지 않는다. 상대방의 영역에 너무 넘어가지 않도록 보이지 않는 선이 일본인들 사이에서는 존재하기 때문이다.

그분 덕분에 지하철을 무사히 내릴 수 있었으나 우리에게 또 하나의 시련이 다가왔다. 게스트하우스는 호텔과 달리 외관이 주택과 비슷해서 찾기가 어려웠다. 무거운 짐을 질질 끌며 세 시간 정도 족히 걸었던 우리는 체력의 한계에 주저앉고 싶어졌다. 그때 또 한 명의 구세주가 나타난다. 우리의 지친 모습을 본 택시 기사님이 그냥 지나치지 않고 택시를 세워 주셨다. 뒤엎힌 주택가 길을 지나 겨우 도착한 게스트하우스 로비 벽에는 "수고했어, 오늘도!" 라고 쓰여 있었고 여행으로 많은 일들이 있었지만 그 글을 본 순간 피로가 싹 풀리며 우리를 도와주신 고마운 분들을 떠올렸다.

변화무쌍한 한국이지만 곤란한 사람을 자연스럽게 돕는 이 고운 마음만은 그대로였으면 하는 바람이다. 한국에는 누르지 않아도 다가와주는 신기하고 고마운 '도우미 폰' 들이 많이 존재한다는 것을 이것을 읽는 여러분도 알아주셨으면 좋겠다.



## 佳作

# 내 마음속의 시리우스이자 폴라리스인 그곳을 향하여

朝野春菜 [帝塚山学院大学]

별들은 밝기에 따라 여러 등급으로 나뉘고 특별히 밝거나 특징이 있는 별들에게는 이름이 붙여져 있다. 겨울철 가장 밝게 빛나는 시리우스, 매년 칠월 칠석날에 볼 수 있는 견우성과 직녀성, 계절에 상관없이 일 년 내내 볼 수 있어 길 잃은 사람들의 나침반이 되어 주는 폴라리스 북극성. 한국에서 보냈던 짧은 단기 유학은 내 마음속에서 가장 빛나는 시리우스이면서 나의 나아갈 길을 인도해 주는 폴라리스가 되었다.

어렸을 때 “용돈이 모아지면 무엇을 사고 싶니?” 라는 질문을 많이들 들었을 것이다. 어른이 되면 “아르바이트해서 돈 벌면 뭐하고 싶니?” 라는 질문으로 바뀐다. 대학생이 돼서 “내가 일을 해서 모은 돈으로 나는 무엇을 하고 싶었을까?” 그것은 너무도 가고 싶었던 한국 유학이다. 짧은 3주였지만 내 마음속에서는 여전히 가장 반짝거리고 있다.

유학 프로그램의 하나로 준비되어 있던 도우미와의 만남. 우리 팀은 3주 동안 네 번 만나서 같이 다녔는데 그 하나 하나를 책임져 주는 도우미가 있었기 때문에 모든 것을 수월하게 끝낼 수 있었다. 광화문에도 같이 가 주었고 경복궁 등에 관한 역사나 상식 등도 가르쳐 주었다. 한국 역사에 대해 직접 체험할 수 있는 곳에 갈 수 있었던 것이 너무 기뻐 감동적이었다. 지방 사람들에게 인기 있는 서울 고깃집에도 같이 가 주어서 서울 토박이들만이 아는 아주 맛있는 고기를 먹을 수 있었다. 또 빈대떡이나 식혜, 핫도그 등 전통 음식이나 포장마차 길거리 음식 등 다양한 장르의 먹거리를 많이 알려주었다. 야경이 보이는 공원과 남산 타워에도 데려다주었다. 패키지여행으로는 경험할 수 없는 현지 대학생의 안내에 의한 서울 투어는 배울 점이 많았다. 모든 것이 좋았는데 도우미 활동 중에서 하나의 오점은 내가 한국어를 잘하지 못했던 데다가 소극적이어서 도우미와 깊은 대화를 나눌 수 없었다는 것이다. 다음에 다시 도우미와 만날 수 있다면 더 적극적인 태도로 더 유창한 한국어로 이야기하고 싶다.

나는 이것이 내 대학 생활의 마지막 추억이 될 줄 몰랐다. 엮힌 데 덮친 격으로 나의 상상과는 다른 대학 생활을 보냈다. 그래도 위로가 되는 것은 코로나가 유행하기 전에 한국에 다녀올 수 있었던 것이다. 이런 추억을 소중히 하고 언젠가 한국에 갈 수 있는 날을 꿈 꾸며 나는 매일 1밀리씩 전진해 나갈 것이다. ‘티끌모아 태산’의 정신으로 폴라리스를 바라보며 나의 방식대로 시리우스를 향하여 앞으로 나아갈 것이다.

## 最優秀賞

中西麻維 [奈良県]

秋深し 韓屋村の 電子錠

## 優秀賞

坪井京奈 [新潟大学]

分かち書き 文字も ソーシャルディスタンス

辻井心 [京都国際高等学校]

ミヤネヨ (미안해요) と  
その一言で 仲直り

## 佳作

吉田紋子〔広島県〕

雲住寺（ウンジュサ）の空へと笑う仏かな

継田真由美〔東京都〕

メイクしてドラマのスター 観てる母

中村暁代〔岩手県〕

カップルが足つけ涼し清溪川

松本美和〔東京都〕

街歩き ハンゲル酔いが心地よい

## 最優秀賞

池田日向子〔新潟大学〕

봄비는 전철 빈 노약자석에는 한국인의 정

## 優秀賞

清水洋子〔神奈川県〕

뒤돌아보면 한움큼 쥐어주는 단골아줌마

今西慶子〔大阪府〕

우리 고양이 밥 달라고 조르면  
나는 예 ~ 전하 ~

## 佳作

後藤将司〔東京都〕

잃었던 일상 코로나가 알려 준 소중한 친구

田中葵衣〔啓明学園高等学校〕

알고 싶어요 마스크에 가려진 너의 진심을

竹野瑠衣〔大阪府〕

보름달이 뜬 하늘을 올려보며 또 서울 생각

井上和恵〔東京都〕

간절한 원함 평범한 일상생활 그저 그것만





A series of horizontal grey lines spanning the width of the page, providing a template for handwriting practice.





駐日韓国文化院

[www.koreanculture.jp](http://www.koreanculture.jp)

駐大阪韓国文化院

[www.k-culture.jp](http://www.k-culture.jp)

